

「時に、お國の皇室にはかういふ寶物があるさうだが、御覽になつた事がありますか」とか、

「何々の發明で有名な何某博士には、子供がなかつたさうだが、そのあとはどうなつて居りますかな？」

といつた風に、本人さへ知らないやうな事をきかれるので、大抵の來訪者は、侯爵の博覽強記に驚嘆して、愈々尊敬の念を増すといふ事をきいた事があるが、前ドイツ皇帝ウエルヘルム二世も、外國使臣などを引見される時に、時々この手を用ゐられたといふ。

それには、一種の政略的意味も加はつて居るであらうが、座談術としても、非常に巧妙なやり方だと思ふ。

### 豫備知識

そこまではゆかなくとも、兎に角、未識の人を訪問しようといふ時には、殊に知人の紹介状を貰つて初対面の人を訪問しようといふやうな場合には、先方の人の経歴や、思想や、趣味などを一通

り紹介者なり、誰なりに話して貰ふ事だ。もし訪問の目的が、プライベートな、家庭的な問題であつたら、先方の生れ故郷や、交友、家族が幾人あつて、子供は幾人あるか。宗教的信仰をもつて居るかどうかといふやうな事を知つて置くと、初対面同志でも割合に呼吸が合つて、話がし易いものである。

O氏の知人に、Sといふ醫者がある。大の子供黨だ。もうかなり老人であるが、Oとまことによく話が合ふ。四五日もOが顔を見せないと、きつと淋しがつて手紙をよこす。どうしてこんな間柄になつたかといふと、十年前、Oが病氣になつた時、友人に紹介されてSの病院へ診察を受けに行つたのが縁である。その時Oの友人が、

「院長は醫者に珍しい子供黨で、子供のことを話しさへすれば喜ぶ、變つた人だ」

と話してくれたので、Oは、まだ會はない先きから、院長は童心の豊かな好人物であらうと想像して居つた。

院長が診察の結果、二三週間入院しなければならぬと言ひ渡された時、Oは思はず、「弱りましたな先生、入院すれば其の間、好きな子供と遊べないわけですね」と言ふと、院長は眼を圓くして、

「君は子供が好きかね」

といふから、

「え、大好きです。それに私は現在小學校と幼稚園に關係してゐますので、毎日子供たちの顔を見ないとさびしくてたまらないのです」

といひながら、ふと此の院長も子供好きだといふ事を思ひ出して、

「さういへば先生も、非常に子供がお好きださうですね」

といふと、

「好きだとも、何しろ子供は純真で實に可愛い。子供は神様に近いものだ。ねえ君、さうだらう」  
院長は子供のやうに目を輝かして、子供の禮讃を始めた。院長とは、その日から、すつかり意氣投合して大の仲よしとなり、入院中は勿論、退院後も一層親密に交るやうになつたのである。

### さぐりの入れ方

自分が對者を多少でも知つてゐるかどうかといふことも、初對面の座談に大いに關係すること

あるが、對者が間接に自分を知つてゐるか否かといふことは、更に注意すべきことである。

どうして對者が自分を知つてゐるのか。何かの機會に人から聞いたのか、それとも新聞や雑誌によつて知つたのか、それを知つて置く話の緒口を引き出すのに頗る便利である。誰しも講演などに行くと、よく未見の人から挨拶されるものだ。

「初めて」とこちらから挨拶すると、

「いや御目にかゝるのは初めてですが、先生の御名前は放送其の他でとうから承知して居ます」とか、

「あなたの御著書を拜見したことがございます」

などと挨拶されて、こちらで却つて面喰ふことが屢々あるものだ。

初對面ではあるが、先方が幾分でも自分を知つてゐるらしいと思はれる時には、どの程度まで、自分を知つてゐてくれたか、それを豫じめ承知して置く必要がある。例へば、

「あなたの事は、誰々さんから承つてをりました」

といはれたとする、其の何某と自分との關係や、何某の性格などを考へ合せれば、自分がどんなふうに対者に紹介されてゐるかといふ事は、略々察知し得るであらう。

## 開口辭と名刺

初対面の人を訪問する時には、知人の紹介状も持つて行くのが普通である。紹介状と一口にいつても、一寸名刺の裏に書いて貰ふやうな簡単なものもあれば、長い手紙を書いて貰ふこともある。就職の依頼といふやうな場合には、出来るだけ詳しく書いて貰ふがよい。紹介状の代りに知人に同道して貰ふこともよからう。いづれにしても紹介のあるなしによつて、初対面の挨拶も違つて来る。全然他人の紹介状を持たない場合には、

「私はいふ者でございます」

といつて名刺を差出す。既に取次に名刺をわたしてあるなら、

「只今名刺を差上げました、何々と申すものでございます」

といへばすむ。前以て電話か手紙で面會を通告してあつたのなら、

「初めてお目にかゝります。私は昨日電話で御都合を御伺ひいたしました、何某と申すものでございます」

と名乗るがよからう。

名刺は社交上なくてはならぬもので、殊に初対面の時には、自分の姓名を知つて置いて貰ふために是非必要である。名刺には姓名のみのものと、姓名の外に住所を入れたものと、官公職名の名刺つきのものと三種類ある。肩書つきの名刺は、その職名を對者に知つて置いて貰ふ必要がある場合にのみ使用すべきで、その必要な人に差出す時には、

「肩書つきで失禮でございますが……」

といつて差出すがよい。肩書も一つ二つはよいが、五つも六つもならべるのはうるさい。中には一枚の名刺に何々會々長、何々會理事等々、社会的に存在さへ認められない小さな會名を麗々しく印刷して置く人がある。一つの肩書では自分を權威づけることが出来ないから、數で行かうといふのだらうが、これでは却つて肩書倒れになつて、對者から、如何にも虚榮心の強い人のやうに誤解される虞れがある。一體に日本人は、肩書をならべたがる癖がある。慎しむべきことだ。

こちらから名刺を出せば、先方でも名刺をくれる。もし名刺の持合せがなかつたら、

「名刺を持参いたしませんので失禮いたします。何の誰と申します。どうぞよろしく」と挨拶すべきである。名刺を受取るや否や、見もせずこれをポケットに投込む人がある。又そ

れをクル／＼と巻いて、指先でいちくりまはして居る人がある。共に先方に對し失禮な仕打である。一應名刺に眼をとめて、鄭重に、名刺入なり何なりに入れるがよい。誰だつて、自分の名刺を粗末にされることは不愉快なものである。小さい事のやうだが注意しなければならぬ。これも座談の一部なのだから。

うまいきつけ

「親しき仲にも禮儀あり」とは、社交上の尊い訓言であるが、特に初対面の時には、禮儀を守り、言動を慎しまなければならぬ。しかしそれかといつて、あまり遠慮し過ぎて、いふべきことまでいひ得ないといふのも感心したことはない。謙讓と退嬰とは似て非なるものである。あまり固くなつて、何かしら、始終警戒して居るやうに見えるのも得策ではない。對者の方でも、自然誠意を示してくれないからである。初対面の座談の目的の一つは、自己を正しく對者に知らしめることだ。猫を被つたり、詭辯を用ゐたりしてはいけない。堂々と、偽らざる自己を對者に示すがよい。誠心誠意を披瀝するがよい。たゞし、喋り過ぎることは禁物だ。

「一見舊知の如し」といふ言葉がある。英雄と英雄の會見などに、よくこの境地がうかがはれるが、普通の場合にはなかくそんな氣分が生れて來るものではない。しかし、お互に或る程度の親しみを持つことは、必ずしも難事ではない。そのためには、出来るだけ自分と對者とを關係づけるやうに注意することだ。一寸したことが兩者を結ぶ縁となることは珍しくないからである。

「私はあなたと同じ學校を出たものです」

とか、

「左様ですか、私もお隣の何々町の生れです」

とか、

「あなたも野球がお好きですか。しかも慶應黨ですか。ハツ／＼。實は私も猛烈な慶應黨でございますまして」

といつたやうなことから、初対面にも拘らず、お互に打ち解けて話を交へることがあるものだ。つまり相互の共通點を見出す事によつてかうした結果が得られるのである。

Kといふ男が、かつて或る重大な用件で、某高等官を訪ねたことがある。見ると玄關脇にたくましい秋田犬がうづくまつてゐた。Kは犬が好きだから何より先に其の犬が目についた。初対面の挨拶

「挨拶がすんで、二三、世間話があつた後で、

「お宅では大へん立派な犬をお飼ひでございますね」

といふと、主人公は、

「いや、大したものではないが、私は犬が好きでしてね」

「さうですか、私も犬が大好きでございます、貧乏をしながら一匹飼つて居ります」

「さうかね。種類は？」

「秋田ではありませんが、やはり日本犬です」

「君も和犬だね。一人同志を得たといふものだね。私は洋犬ならあまり欲しいと思はないのだ」

「さうですか。私も犬の方では純然たる國粹黨です」

「いつか一つ見せて貰ひたいね」

犬の話はなかく、盡きない。犬を媒にして初対面とは思へない程話はずんだ。勿論肝腎の用件を持ち出すことを忘れなかつたが、これは思つたより簡単に片附いた。以後、犬によつて結ばれた關係が、今もつゞけられ、益々親密の度を加へつゝあるのは、奇縁と稱すべきものであらう。

奇縁といへば、意外の時、意外な場所、あてにもしない人と會見することも珍しいことではな

い。つまり、これは豫想しない初対面だ。何かの會合の場合などに、誰かによつて、

「一寸君、何某君に紹介しよう。丁度こゝに見えてゐるから」といふやうなことで、名前だけは知つてまだ一度も會つた事のない人、又はかね／＼會ひたいと思ひながら、その機會のなかつた人に引合されることがあるものだ。よしその人が知名の人でないにしても、人が親切に紹介してくれるといふなら會つて置くがよからう。何時どんな事で會はねばならぬ用事が起らぬとも限らないし、なるべく顔を廣くして置くことは、社交上大切なことだからだ。但しその人が、社會的地位は高くとも、人格的に重大なる缺陷ある人ならば、體よく斷るのは隨意である。

### 自己紹介の要領

何かの會合の席上、幹事の發議で自己紹介といふことが行はれる。これは何でもない事のやうだが、なかく／＼むづかしいものだ。

「私は何々と申すものです。どうぞよろしく」

これも一種の自己紹介には違ひないが、自分を來會者にハッキリ印象させるには、何となく物足

りない。それかといつて、時間の経つのも構はず、長々と自己吹聴をやるのも感心出来ない。『いやな奴だ』『非常識な男だ』といふやうな悪印象をのこすおそれがあるからだ。短くて、垢ぬけがして、そのくせ人の心に強く印象づけるやうな自己紹介は、決してなまやさしいものではない。

いつか、童話界の先輩某氏の宅に、三四十人の同志が集つたことがあつた。

「今夜は大分新しい顔が見えてゐるやうだから、一通り自己紹介をお願いします」

といふ主人公の申出で、一人々々立ち上つた。

「私は何々縣の者で、何某と申します」

「私は何某と申す者で、生れは何々縣です」

殆んど千篇一律だ。

其の中で二人だけやゝ變つた挨拶をした。

「私はこのお江戸とは昔から關係の深い長崎のものであります。江戸の敵を長崎で討つさうですが、私は長崎の失つた文化を江戸へ求めに來たものであります」

といつたのは長崎縣の某氏だ。

もう一人は紀州の某氏だ。

「今夜こゝに來て見ますと、私と同じ郷里から出て來たものが大勢をりますので、大へんなつかしく思ひました。(一座は意外さうな顔をした)それは、皆さんの前におとなしくならんでゐる蜜柑です。これだけ申上げると、私がどこの生れであるか略々お察し下さるであります。私は何某と申す者で、蜜柑の本場紀州の産です」

この短かい挨拶で、しつかり一座の人々の心を掴んでしまつた。目の前にある蜜柑と關係づけられた其の人の名は、必ず皆の頭にのこつたに違ひない。

對者が一人であると多人數であるとを問はず、初對面の座談は、社交の第一陣である。これに失敗したならば、第二陣も第三陣も覺束ないといふ事を、くれぐれも記憶せねばならぬ。

## 二十二、讚辭と苦言

瘦せ衰へた病身の子供を持つた人のところへ、或日お上手者の若い男がやつて來た。

「お宅には可愛いお子様がゐらつしやるので、結構でございますな」

「いや、子供にもよりけりだね。こんな弱い子供では仕方がないよ」

「どう致しまして。近頃は太へん御ふとりになつたぢやありませんか」

さういはれると、なるほどさうかなアとも思ふ。太つた、丈夫さうだといはれて腹をたてる親はない。そこが親心のありがたさだ。

「さうかな。そんなにふとつたかしら？ 毎日見て居るとちつともそんなふうに見えないが……？」

若い男はこゝだと思つて、

「御心配には及びませんよ。第一、御丈夫でなくてどうしてあの針のやうな細いお首で、大きなお頭を持ちこたへることが出来るのですか」

といつて、すつかり對者を怒らしてしまつたといふ笑話がある。

人は誰でも悪口を聞かされるより、褒められる方が嬉しいものである。お世辭をいつてわるいと思つても、ちやほやされると悪い氣持はしないのが普通の人情である。しかし褒めるのも褒め方によりけりで、言ひ過ぎたり、脱線したりすると、却つてとんでもない失敗を招く。何にしても程が大切だ。

## お世辭と追従

社交上、お世辭も或程度まで必要である事は認める。しかし度が過ぎると阿諛となり、追従となり、おべつかとなる。こゝまで来ると自分の心の浅ましさを見すかされる。お世辭にもやつぱり眞心がこもつてゐなければならぬ。心にもない空世辭は、却て對者に不快の念を抱かせるばかりである。

小學校の學藝會に出て、上手に童謡を歌つた子供があつたとする。我が子の歌に聞きとれて喜んでゐる母親に向つて、傍から、

「お宅のお嬢さんは、太へんお上手でございますこと」

といつたら、

「いえ、どう致しまして、まだ〳〵駄目でございます」

と謙遜しながらも、母親は心の中では嬉しくてたまらないであらう。

「お嬢さんは、他の學科もよくお出来になるんですつてねえ。其の上あんなに音樂の天才がおあり

なさるんですもの、まあどんなにかお楽しみなことをごさいますせう」

こゝらあたりで止めて置けば無難であるが、これ以上褒めあげようとする問題だ。

「お宅のお嬢さんのやうに、今からこんな立派な天分をお持ちになつてゐる方は、學校中はおろか世界中さがしたつて二人とはありませんよ。今にきつと、第一流の大音楽家におなり遊ばして、やがては世界的に、名聲をお博しになるのも遠い事ではありませんわ。そしたら私共のやうな者は、めつたにお嬢さんの御聲もきく事が出来ないのに、今日はまア何といふ幸福な日をごさいますせう。未

來の大音楽家の獨唱を聞かせていただくことが出来るなんて、勿體なうございますわ」

いくら自惚の強い母親でも、こんなおべんちやらを聞いて嬉しがる人は萬人に一人もあるまい。

「あの人はきちがひだよ。人をばかにするにも程があるわ」と憤慨されるにきまつて居る。

### 苦言と忠告

こんな極端な例は格別として、「自惚と何とかの者はない一人もない」といふ位だから、人を褒めて怒られる事は、めつたにあるまいが、その人の爲めを思つて親切に忠告したのが仇となつて、對

者を怒らせる事はよくある事だ。勝手にするが、いやといつてしまへばそれまでだが、それ程の親切があるなら、相手の人が心から改心するやう、十分効果があるやう、忠告もし注意もするのが本當ではあるまいか。

心の大きい、傑出した人物は格別、凡人は自分の行爲について、非難がましい注意や忠告を受け

るのを喜ばない。たとひ自分でも悪いなと氣がついてゐても、

「君はいけないぢやないか。もう少し氣をつけたまへ」

と頭からやつつけられると、決していゝ氣持はしないものだ。

「いや、有難う、全く僕が悪かつた。これから氣をつけるよ」

と心ではいはうとしてゐるのだが、面と向ふと、ついふら／＼と、

「大きにお世話だ。自分の事は自分で始末するよ」

といつてしまふ。相手がすつと目上の人か、上役でもある場合には、さすがに言葉を返すわけには行かないから、神妙さうに承つてはゐるが、その實、心の底では、反抗心がムク／＼と頭をもちあげてゐるものだ。



鞭と林檎

人に忠告したり、苦言を呈したりするには呼吸がある。忠言や苦言は鞭である。爲めにはなるだらうが、うたれると痛い。だから鞭を加へる時には、片手に林檎を用意しなければならぬ。人にはそれ／＼自尊心といふものがある。それをひどく傷つけない程度に、やんわりとやるのが、上手な忠告であり、上手な苦言である。

たとへば、店員にハキ／＼と返事をしない男があつたとする。

「お前の返事の仕方は何だ。もつとハッキリ、はいと返事をしたらどうだ」

心ではかう小言を言ひたい處だが、さうあからさまに言つてしまへばおしまひだ。その場合、主人が、

「君はよく働いてくれるし、正直だし、その點に就いては何一ついふことはないが、此の上の慾には、もう少しハキ／＼と返事をしてほしいな。曇つた鏡は役にはたゝない。一つ今日から發心して見ないか」

かういつたらどうだらう。言はれた方でもなるほどと思ふに違ひない。

「何とかして其の一つの缺點をとりのけませう」

と氣がついたら、しめたものだ。

申すまでもなく、百人中九十九人までは、皆凡人なのだ。凡人相手の小言や忠告には呼吸がある。

殊に若い者相手に於いてをやで、鞭と林檎を併用しないと、うまくこちらの好意が徹底しない。

因果はめぐる

口先だけで、心にないお世辭はほんとに人を喜ばせることが出来ないが、忠告や苦言は尙のこと、心の奥底から出て來た言葉でなくては力がない。腹立ちまぎれに怒鳴りつけたりする事は、最も慎まねばならぬ。

「君子は怒を移さず」といふ言葉があるが、君子ならざる凡人は、やゝともすれば自分の怒を自分より目下の者に移し易い。同じ苦言にしても眞にその人の爲めを思つて言ふ苦言か、腹立ちまぎれに言ふ苦言かによりて、對者の受取方がまるで違ふ。其の人の爲めよかれと叱る苦言には、理性が

伴ふが、怒るのは感情だ。感情の怒は對者に反感を惹起させるだけで、何の効果もないものだ。いつかの「キング」で、麻生豊氏の「因果はめぐる」と題する面白い漫畫を見た事がある。奥さんに小言を言つたが、奥さんも蟲の居所が悪かつたと見え、三太郎に當る。子供はその鬱憤を女中に叩きつける。女中は御用聞へ、御用聞は飼犬へ、飼犬は猫へ、猫は鼠へと、順々に怒を移した。鼠は主人の寝てゐる頭の上で散々あばれまはつた爲め、主人は一晩中一睡も出来ず、翌朝睡眠不足の眼をこすり／＼出社すると、定刻を過ぐる事既に數分、社長から大目玉をくつたといふ筋である。無理な小言は言はない事だ。

常陸山と常の花

真心のこもつた苦言や忠言は、たとひ一時誤解を招き、先方の怨みを買ふやうなことがあつても、最後には必ず對者の心を動かすものだ。凡人の悲しさ、苦言は決して、有難いものではないが、誠心誠意の忠言や苦言には、思はず頭が下るものだ。

近世の名力士常陸山谷右衛門は、稀に見る弟子思ひであつたが、それだけにその稽古は猛烈を極

めたものである。

或日、常陸山は、例によりて弟子達の稽古振を見てゐたが、何と思つたか、いきなり傍にあつた心張棒を持つて土俵の真中にあらはれ、

「此の野郎、怠けてばかりゐやがる」

とばかり、そこにゐた弟子の一人を捕まへて、いやといふ程どやしつけた。

「いくら言つて聞かしても分らねえのか、きさま見たやうな根性の曲つた奴は、いつその事相撲取を止めて、百姓になつてしまへ」

叱られた弟子は、其の場で平謝りに謝まつたが、心の中ではくやくしてたまらなかつた。彼は師匠を怨んだ。一旦はこのまゝ田舎へ歸らうかとも思つた。しかし彼も馬鹿ではなかつた。直ぐに思ひかへした。

「よし、やるぞ」

彼は生れ變つたやうに稽古に熱中した。技倆はめき／＼とあがつた。數年ならずして遂に入幕とまで漕ぎつけた。

其の時である。師匠の常陸山は此の弟子を膝下に呼び寄せた。

「お前に見せてやるものがある。これだ。見覚えがあるか」  
見ると、正しくそれは、先年師匠が自分を殴りつけた心張棒である。

「親方、あの時はすみませんでした」  
かういつて彼は、師匠の前に平身低頭した。

「分つたか。俺はあの時、お前が憎くて殴つたのではないぞ。どうかしてお前を一人前の力士にしたいと思つたばかりに、あんな手荒いこともしたのだ。よく辛棒してくれた。かうしてお前が入幕まで漕ぎつけたのも、思へばこの心張棒のおかげだ。記念の爲めに一生お前の寶物にするがよい。だが今はまだ此の心張棒は渡されぬ。これからも、少しでも怠けたり、圖に乗つたりしたら最後、又此の心張棒がお前の頭に飛んで行くぞ。お前がもう一段出世するまで、此の心張棒は俺が預つて置く」

弟子はこれを聞いて心から感泣した。師匠に殴られた時は骨身に徹して痛かつたが、其の言葉の裏には涙があつたのだ。後の横綱常の花は、實に此の愛の苔に更生した弟子であつたのである。

### 雅量と狹量

人間は神ではない。時には失敗もあるだらうし、間違つたこともするであらう。そんな時に、面をおかして直言し、忠告を與へてくれる人こそ、本當の知己であり、親友である。自分の缺點を指摘されることは、半面甚だ不愉快な事であるが、實際は有難い事である。人によると、何か注意される、すぐむきになつて怒る人がある。又自分の非を知りながらも強辯する人がある。

「君はまことに淡泊で面白いが、初対面の時には誤解されるやうなことがないとも限らないから、禮儀作法とか、言葉遣とかに氣をつけた方がいゝよ」

或人が、知人の一人に向つてこんな注意を與へた。  
すると、友人はすぐむつとして、

「君がそんな注意をしてくれるからには、實際に僕が誤解をされてゐるとでもいふのかね」と逆襲して來た。

「いや別に大したこともないが、そんな噂を一寸耳にしたからさ」

「誰がそんなことをいつてゐたのか」

「誰といつて名指す必要もないがね」

「いや、ある。僕は直接其の人から十分の注意を受けたいのだ」

こんな喧嘩腰の態度では、もう二度と誰も注意して上げようとは思ふまい。

お世辭はいくら聞き逃してもいゝが、苦言や忠告は喜んで聞かねばならぬ。それだけの雅量がないければ、人間は決して大成するものではない。

それに引きかへ、目下の者から、

「先生、それはかうなすつた方が、よくはないでせうか」と注意されて、

「いや、ありがたう。なるほどその方がいゝかも知れんな。一つ考へて見よう」

といつて快く受け入れる人はえらい。さうあるべきである。それかといつて、主義主張をまげて、人のいふまゝになれといふのでは決してない。

何かにつけて自分の缺點を注意して貰へる事は喜ぶべき事である。それが好意か悪意か判別し得ないやうな人なら、忠告する價値のない人だ、よしんば其の忠告が多少、ピントがはづれてゐるな

と思つても、一應は感謝して受くべきである。反省もせずに逆襲したり、心では十分自分の非を悟りながら、わざと反抗的態度を取る如きは、自己の狭量を自白するやうなもので、將來ある人の取らざる所である。

### 二十三、女性と座談

聖フイリツプ・ネリといふ聖僧の許へ、或日一人の若い娘が訪ねて來た。此の娘は決して悪い性質でなかつたが、兎角下らないことをしやべり歩くのが缺點であつた。其の爲めに、少女自身も飛んでもない目に遭ふことが再三あつたが、悪い癖は容易にやまなかつた。

聖僧は少女に向つて諭した。

「お前さんの缺點は、人の悪口をいつて歩くことだ。私はお前さんに其の罪を贖ふことを命じます。先づ市場へ行つて雞を一羽買つてお出でなさい。そして町を歩きながら、雞の毛を抜いて道々撒いてくるのです。毛をすつかり取り取つてしまつたら、私のところへ來て其の事を報告しな

「さう」

少女は非常に軽い罰だと思つたから、いはれるまゝに雞を一羽買つて、毛を毫りながら歸つて来た。聖僧は微笑みながら、

「よろしい。これで第一の贖ひはすんだ。今度は第二ですよ」

「それはどんなことでございますか」

「いゝかい、今度はお前さんが今歩いて来た道を引き返して、さつき撒いた毛をすつかり拾ひ上げて来るのです」

「それは無理ですわ、もうさつきから風が吹き飛ばしてゐますもの。みんな拾ひ集める事なんか、とても出来ませんわ」

「さうです。其の通りです。お前さんがこれまで口から撒きちらした下らない話も、その羽毛と同じやうに方々にちらばつたのです。そのためにどんなに他人が迷惑したか知れませんか。お前さんは、それをもとの口へ呼び戻すことが出来ますか」

「……いゝえ」

娘の聲は糸の如く細かつた。

「それごらん。一度口から出た話は、どうしても再び口へは戻らないのだよ。何か悪口をいひたくなつたら、直ぐ唇を閉ぢなさい。決して軽い羽毛と同じやうに、四方八方に撒き散してはいけません」

此の話は饒舌家の婦人に對する戒めと解せられる。女三人集れば姦しいといふが、兎角女は口數の多いものと昔から相場がきめられてゐる。これは女性として慎しむべきことである。

しかし、一方からいふと、女性は、天性、よく話す才能を具へてゐる事を證據だてるもので、決して悲しむべきことではない。饒舌はいけないが、よく語ることは結構なことだ。女だから引つこんで、黙つてゐなければならぬ理由はない。況んや言論を有力なる武器とする今日の時代に於いてをやだ。

### 女性は談話の天才

實に女性は談話の天才である。其の音聲が男子よりも高く、刺激が強過ぎるといふ點で、演説には多少不向きかも知れないが、座談にかけては男子の及ばぬ獨自の境地をもつてゐる。

大道に一人の酔どれが倒れてゐる。そこへ一人の男が歩み寄つて、

「おい、起きたまへ、こんなところに寝てゐちや危ないか」

と注意を與へてやつた。

「何だい。寝てゐようと起きてゐようと俺の勝手だ。自動車が通りたいなら俺の腹の上を走つて通れ！」

酔どれは頭として動かうともしない。見るに見かねて、一人の若い婦人が、

「もしく、あなた、危なうございますからお起きなさいませ」

と一言いつてやると、酔どれはきまり悪さうに、

「へえ、姉さんすみませんな。起きますよ、へえ起きますよ。すまねえ。かんべんしておくんなさい」

とおつ／＼口の中でいひながら、起き上つて歩き出した。よく吾々が目撃する路上小景である。

やさしさ、柔かさ、それは女性が持つ大きな武器である。同じ言葉でも、それが女性の口から發せられると、いかにも穏やかに響くものだ。勝海舟は、常に、若く美しい女に取次をさせてゐた。

そしていふところが面白い。

「取次に女を使へば、先づ來客の心を和げるから、どんな談判にも都合がよろし」

流石に海舟、女性の天分を巧みに利用したところが偉い。近頃の女性が、職業方面にも目覺しく進出して來たのは、いろいろな理由もあらうが、彼女等の多數が座談の天才であることが、最も大なる力になつてゐると思ふ。サーピスの巧みな點では、男子は到底女性の足許にも及びつけない。

### 駟も舌に及ばず

けれども「よく泳ぐ者は溺れる」といふ譬への通り、よくしやべる者は、やゝともすると、聖僧に訓へられた少女のやうに、わざはひを招き易い。座談の天才である女性の注意すべきところだ。よく語ること、それは決して悪いといふのではない。たゞ時と場合を考へて物を言ひなさいといふのだ。

いつか新聞に出てゐた實話であるが、北海道の或る村の錢湯で、近所の細君達が四五人一かたまりになつて、湯槽の中で世間話に花を咲かせたが、其の中の一人が、

「此の頃のやうに不景氣では、全くやりきれませんね」

といひ出すと、

「さうですとも、私のうちなんか、商賣が全く上つたりですわ」

「工場の方もから駄目で、働くだけが損ですよ」

「この有様でもう一二年もつゞいたら、ほんとにどうなることせう」

などと、いづれ劣らず泣言をならべ立てゝゐたが、たつた一人教員の細君だけは、いとも朗かな顔をして、彼女等の泣言を笑ひながら聞いてゐた。

「あなたのところはどうか？」

かう聞かれると、教員の細君は待つてゐましたといはぬばかりに、

「私のところなんか不景氣に感謝したい程ですわ。月給はもとのまゝだし、物價はうんと下つてゐますからすつと生計が樂で、實質的には四五割も増俸されたやうなものですよ」

とさも誇らしげにしゃべり立てた。この言葉が、如何に他の細君達の嫉妬羨望を招いたかは、一兩日後、村會が、錢湯に於ける教員の細君の自慢話を理由に、教員の減俸を議決したことによつて察し得られるであらう。

此の細君の言葉は、決して嘘ではあるまい。他の職業に従事してゐる人々に比べたら、概して學

校教師の生活は樂であるかも知れない。此の細君は正直だといへば言へるが、他の者がみんなこぼしてゐる中に、自分一人得意がるのは智慧のない話だ。

「ほんとに、お互に此の不景氣には困りますね」

と調子を合せて置けば何でもなかつたのである。それを一種の虚榮心から、不用意に吐いた一言が、自分の夫は勿論、他の教員達にまで飛んだ迷惑を掛ける結果となつたのだ。馴も舌に及ばずとは此の事だ。

### 虚榮の代價

誰しも自分を、よりよく見せたいといふのは、人情の自然であつて、あなたがち答むべきことではないが、十のものを五十にも百にも見せようとする虚榮は、どこまでも慎しまねばならぬ。男性にも虚榮心はあるが、女性に比べると遙かに弱い。或る種の女性は、自己の虚榮を満足させるためには、平氣で嘘も吐けば、時には刑にふれるやうな大それた事さへする者がある。

或る虚榮心の強い細君が、知人から招かれたが、集る者が皆知つた顔らしいので、どの着物を着

て行かうかと思ひ惱んだ。あの着物は、何日ぞや何處そこへ着て行つたことがある。あの帯はあの人が知つてゐる。晴れの會合に、同じものばかり着て行くことは、堪へ難い苦痛であつた。それかといつて今すぐ新調するだけの餘裕もない。思ひ餘つた末一策を案じ、そつと貸衣裳屋に行つて、半日もかゝつて氣に入つたのを選び出し、かなりの損料で借りることにした。

いよ／＼其の日が來た。其の細君の着物は、さすがに一座をリードしてゐた。

「まあ奥さんのお召物は、何ていゝ柄でせうね。」

かう他の女からお世辭をいはれると、細君の鼻はメキ／＼と高くなつた。彼女は群雞の中の孔雀のやうに誇らしげに、

「いゝえ、つまらないものですよ。すつと以前に作りましたので、少々、派手過ぎるのですけれども、藏つておいてもつまらないと思ひまして、着てまゐりましたの」

「ほんとによくお似合でございますこと」

「いえ、どう致しまして、こんな年になりましたは着物のことなんか考へてもゐられませんから、昔作つておいたのが、まだたくさんありますので、當分それを着つぶして行かうと思つてますの」

細君はわざと謙遜したやうにかういつたが、内心の得意さは押しかくすべくもなかつた。

翌日になつて、早速借着を衣裳屋へ返しに行かうと思つてゐるところへ、近所の心易い奥さんがひよつこり訪ねて來た。昨夜の會衆の一人である。

「昨夜は失禮致しました。實はまことに無様な願ひですけれども、……あなたが昨晚着ていらしたお召物の模様が、本當によかつたと妹に話しますと、ちやうど一揃作らうと思つてゐた矢先だから、是非参考に見せていたゞきたいとかう申すのでございます。如何でせう。あれを二三日お貸しいたゞけないでございませうか」

細君は、今更、貸衣裳屋から借りて來た品ですともいへないから、

「えゝ、お易い御用ですわ……」

と心にもない返事をする、

「まあ、有難うございました。どんなに妹も喜ぶ事でございますませう。あんまり厚かましいお願ひでございますが、もし前にお作りになりましたもので、参考になるやうなお品がございましたら、それもお借り致したいのでございますが……」

虚榮の細君はいよ／＼窮した。それでも決して其の場をいひ抜けることは忘れなかつた。

「そんなにおつしやつていたゞくやうなものはございませぬわ。でも、お間に合ひますればいつで



も御用立てますが、唯今ちやうど生憎と、みんな洗張りに出してをりますので」

「あゝさうでございますか。ではどうぞ昨晚のだけをお貸し下さいませ、ほんの二三日でよろしくございます」

「いゝえ、どうせ使はないものですから、およろしければ御ゆつくりと御覽下さいませ」

近所の奥さんはまた借りの着物を抱へて、いそぐと歸つて行つたが、ほんの二三日といつて置きながら、五日たつても六日たつても返してくれないので、細君は毎日かさ高になつて行く損料の胸算用をしては、いら／＼してゐる外はなかつた。虚榮心を満たす代價も、なか／＼安くはないと、細君がそこに気がつけば幸ひであるが……。

### 多辯と饒舌を慎め

繰り返していふ。女性に談話の天才である。今日のやうに女性の地位が向上し、女性の活動範圍が擴大せられた時代に於ては、女性は、須らく其の天分を十分に發揮して、女性としての使命を立派に果さなければならぬ。しかしそれとても、相手に依り、場所に依り、問題によつて、どんな話

をしたらいゝかを、常に心掛けねばならぬ。女湯が男湯に比べて著しく騒々しいといはれる事は、女性にとつて決して名譽なことではない。「口數多ければ品勢し」と昔の人はいつてゐるが、口數が多くても妙くても、それが必要な言葉であれば、少しも差支はない筈である。要は愚にもつかぬ駄辯や、要領を得ない饒舌を慎む事だ。眞實を語れ！ それ以外に雄辯はないと、雄辯哲學は吾々に教へてゐる。

## 座談と實際

### 一、貴賓に對する座談

自分と對等の人か、目下の者との座談なら、何でも思ふことがすらくといへるが、目上の人、特に貴賓に對する座談になると、誰しも堅くなつて、いふべきことさへ十分にいへないのが普通である。相當場數をふんだ年輩の人でも、貴賓の前に出ると、どうかするとガタ／＼ガタ／＼からだが震へて、全身冷汗をかくやうなことが珍しくない。修養の必要はそこにある。かういつたら失禮に當りはしないか、かういつたら氣を損じはしないかと氣をもんでゐると、なか／＼適當な言葉が出て來ないものである。一概にはいへないが、貴賓はあまり口數をきかない。對者がすん／＼話しかけてくれれば、こちらもそれに釣られて行くが、對者が寡言だと、一層こちらが窮屈なものがある。

貴賓といつてもいろいろあらう。いかに高位高官でも、人格的に下劣な人に對しては、心から尊敬の念を拂ふことはできないが、こゝでは日頃から崇敬してゐた貴賓を對象としての立言と考へていたゞきたい。

貴賓に對しては、勿論、尊敬の念を失つてはならぬ。言葉を慎み、態度にも十分注意すべきである。しかし貴賓だからとて決して恐れてはいけない。たゞむやみに恐縮してはいけない。恐縮と尊敬とは別物だからだ。始めからしまひまで、恐縮の持續で、思ふことの十分の一もいへずに引き退るやうでは、いつまでたつても社交界に活躍なんか出來る筈はない。座談には勇氣が要ると説いたのは此の事だ。自分は今貴賓と相對してゐる、自分の所信を貴賓の前に披瀝して、貴賓の知遇を得るには千載一遇の好機である。かう思つたら、自然に勇氣が出て來るものだ。くれ／＼も尊敬と恐縮とを履き違へてはならぬ。丁寧な言葉や態度は結構だが、それが過ぎると、徒らなる追従、阿諛と同一視されて、却つて貴賓の輕蔑を買ふ結果となる。誠心誠意と勇氣、心に問うて恥づる所なくんば、千萬人と雖も我征かん」といふ意氣あつて、はじめて貴賓と對座して、立派に座談の目的を達し得るのである。

## 將軍と書生

再び「寄生木」の一節を引用する。大木將軍といふのは乃木將軍、書生は、後に陸軍中尉となり、病氣の爲めに二十八歳で死んだ篠原良平（小笠原善平）である。

翌々日の午後、良平は再び大木邸の門を入つた。突當つて左し、格子戸を開けて玄關に立つた。

（來意と姓名は既に將軍に通じてあつたのである）

「お頼み申す、お頼み申す」

「むーッ」

聲荒らかに白軍服の一大漢が出て來た。將官!! 良平はビツクリした。生きた將官を見るは今が最初だ。

「來い！」

階段を蹴つて將軍は二階に上つた。良平は俯いて従つた。白袴に漆黒の光ある長靴。階段をふむ

音聲々。拍車の響チリン、チリン。良平は先づ膽を奪はれた。恐しい將軍よと思ひつゝ従つた。（中略）將軍は儼然と肩を聳かし、兩手腰の邊をさゝへて、屹立したまふ、無言に此の絶景を眺めてゐる。やゝ久しく経つた。良平は腰を折つて一禮し、椅子引きよせて先づ腰を下ろす一刹那、百雷の響、頭上に破裂した。

「馬鹿ッ！」

頭の頂邊から足の爪先まで睨むやうに、じろく見上げ見おろしながら、

「貴人に先んじて席による。そんな禮法がどこにある？——立つとれ！」

良平は、來なければよかつたと心に悔いた。然し、かねて父の戒めによつて、一先づ歸省の覺悟はしてゐたので、思ひの外、沈着の態度を保ち得た。

將軍は悠然として豹の皮に倚つた。そして朴訥の言葉で問答がはじまつた。

「そこの國はどこか？……うむ、陸中の東海岸か。すると、えーッ、海嘯のあつた處ぢやな。海嘯の損害はどうぢや。蒙つたか、蒙らぬか？」

「はア。親戚内では流された家も、死んだ者もござりやんすが、家族は皆害を蒙りやせん」

「職業は何か？」

「はい、農業でござります」

「両親は揃つてゐるか？」

「はあ」

「何をしとるか？」

「……………」

「どこに居るか？」

「母は郷里に……………」

「ちや父親は？」

「あしここに」と、良平は黒塚を指した。

「えッ。彼處は宮城監獄ぢやないか、監獄にか？」

「はい……………」

「うーむ」

將軍は頭を傾げて慥然とした。

「すると、父親は監獄に今ゐるのぢやな？」

「はア」

「どうして？」

「私にはよう判りやせんが、數年前、郷里の村長を勤めて居りやんしたが、公金費消の嫌疑で拘引になりやした。盛岡裁判で宣告を受けやんしたが、おやちは、おかみさまの金を盗んだり、使ひこんだ覚えはござりせんちふので、控訴して仙臺監獄にござります」

將軍は嘆息し、驚の眼見はつて良平の頭を凝視した。人間に貴賤上下の別があるものかと、良平も劣らず將軍を見つめた。頭髪は縮れてゐる。眼光炯々として眼は少し血ばしつてゐた。疎らかな顔持は斑白。悠然と控へた手には、著しく毛が生えてゐる。ボタン式白軍服、袖に横線二つを劃して、三個の銀星が白く胸間に光つてゐる。

「其の他の者は？」

「皆ままでござります」

「財産はどの位あるか？」

「田も畑も山林ももつてをりやんすが、其の高はどの位か、私には一向判りやせん」

「下男とか、或ひは下婢とかいふものを使つとるか？」

「はあ、使つてをりやんしたが、父が居なくなりやしてから、皆生家さん歸りやんした。暇をくれい、暇をくれいと申しやして」

「馬とか、牛とかいふものを飼つとるか？」

「はあ牛は一頭もござりせん。馬は二頭ありやした。一頭は金錢に困つて賣拂ひやしたし、一頭は石垣から落ちて死にやした」

「そちの年齢は？」

「はい、算へ年で十六歳。満で十四年三ヶ月になりやんす」

「そちは軍人を好むのか？」

「はい、軍人になりたうござんす」

「何がため軍人になりたいのか？」

「東洋の若い人達は、皆軍人になつて、御國のために盡さねばなりやせん」

「家の許可を得て仙臺に來たか？ どうだ？」

「……………」

「どうか？」

「はア。祖母にだけ、かねて目的を打開けやんしたけれど……………」

「軍人になるについて、そちの家の皆々はどう考へてゐるか。判らぬか？」

「異存のあらう筈は御座りせん。唯父が歸つたなら、仙臺なり東京なり、また盛岡なり、出して勉強させるから、それまで辛抱せ辛抱せツて、皆申してをりやんした」

「何日を費して仙臺に來たか？」

「丁度四日かゝりやんした」

「旅費はどの位持つて來た？」

「六圓ばかりで御座りす」

「それで足つたか？」

「十分澤山であまりやした」

「旅行品としては、どんなもの？」

「軍人鑑二冊、近世美術と萬國地誌、その他少しばかりの雜品」

「目下はどこにゐる？」

「はア。下宿に居りやんす」

「何しにこちらの邸に來た？」

「はい。あなた様の御馬あつかひなり、お庭の掃除なりともして、將來軍人にして、いただくつもりで……」

「誰に教はつて、こゝに來た？」

「誰にもきゝやんせん」

「どうして來た？ なぜ來た？」

思ひ胸にあつて、言に出ず、良平は黙つて立つた。

「なぜ來た？」

「……」

「理由がなかつたら歸れ。直ぐ歸れ」

「はア、寄らば大樹の下と思ひやして……」

「なにッ。今一度言つて見ろッ！ 聲高く言へッ！」

「寄らば大樹の下と思ひやして」

「うむ、判つた。そこでこちらがぢやのう。えエーッ。世話せんと言つた時は、そちはどうするつも

りだ？」

「はア、その時は東北學院労働會へ入りやして、牛乳を配つたり、また新聞を賣つたりして勉強する心組でござりやんした」

然し父の訓戒によつて、歸省の運命は既に迫つてゐると、良平は心に叫んだ。

「うむ、いつぞやそちは、二名の外國人と仙臺市中を歩いたことはなかつたか。どうぢや？」

良平は驚いた。書き落したが、仙臺に來てから大木家に來るまでの間に、宣教師を訪うて、共に市中を歩いた事があるのだ。どうして將軍がそれを知つとるか、良平は頗る驚いた。

「ありやんす。米國の人、宣教師、名は忘れやんした」

「そちの家の宗教は何か？ 基督教か？」

「いゝえ、さうでござりせん」

「佛教か、神道か？」

「はい、これと申す宗教もござりませんが、人が死ねば寺にやりやんす」

「何故宣教師と話したか？」

「はア、果して神様が天に在ますものならば、一日も早く父の救を祈るため、基督教の信徒になる

「ベツと思ひやんして」

「學校は昨年卒業したさうだな。勉強はどうであつたか？」

「はい。不東者でござりすが、しあはせに、いつも一番でありやんした」

「卒業後、毎日家業の手助けをしたか、どうか？」

「半日づつ働きやんした」

「あと半日は？」

「半日働けば厭きやすから、逃げて家さ歸りやんした。田植も致しやんした。田草もとりやした。

木も樵りやした。一番木を樵るのが骨が折れやした」

「卒業後、學問は？」

「小學校長に日本外史、リーダーを夜學に行つて習ひやした。その他雜誌などを……」

「郷里から軍人が出とるか？」

「はい、騎兵二聯隊に、長沼と申す人が居りやす」

「騎兵の何か？」

「二等兵でござりす」

「逢うたか？」

「はい、逢ひやした」

「うむ、逢ふのがよろしい。それが人道だ。——何れ取調ぶる事もあるから、滞在の費用はこちでみんな支辨するから兩三日待て。来る何日の午後四時頃また來い。それまで中に、自宅出發から仙臺に着くまでの經過の事柄ぢや、うむ旅行日記、うむ、を筆にあらはして我邸に置いとけ」

良平はしみく頭をさげて大木邸を辭した。

## 二、目下との座談

貴賓に對すると同様、長上との對座もなか／＼氣骨の折れるものである。少し氣むづかしい相手である、貴賓以上に氣をもまされる事がある。

それに比べると、何といつても自分より年下の者や身分の低い者の方が話しよい。それはたしかに事實であるが、それとても、自己を對者の位置に置いて考へ／＼話さないと、對者をして十分に

意思を發表せしめる事が出来ないばかりか、時としては妙な誤解や反感を抱かせる結果となる。人は一般に長上に對しては、禮儀作法や言葉づかひに注意するが、目下の者に對しては極めてルーズだからである。

「家庭百話」といふ本の中にこんな意味のことが書いてある。

「日本の禮法は、概して下より上に對するに備はりて、上より下に對するに缺くる所多い。家庭の禮法に於ても、親は子女に對して、行儀をよくせよ、毎朝手をついてお早うと謂へ、親には孝行を盡さねばならぬと厳しく申付けて置きながら、自分ではさつぱり禮儀を守らない。實に傍若無人の有様である。子女は酒も煙草ものまぬに、親は平氣で子女の前をも憚らず、酒をのみ、煙草を吹かしてゐるではないか。子女は小學校に於いて行儀作法を教へられ、膝も崩さぬやうに注意してゐるのに、親爺は大胡坐のまゝ、晩酌の饌につくなどは珍らしくない。甚だしきに至つては、怪しき料理屋の女などを家庭に引き入れ、客人の酌をなさしめる業さへある。かゝる無作法を臆面もなく子女の前で行ひ、恥しいとも思はぬやうな親達に、なんで子女を教育する資格があらうぞ。

歐米の文明國では、親は其の子女に對し相當の禮儀を守る。下層の勞働者といへども子供の目前では酒を飲まぬのが通例となつてゐる。金錢に關する家事上の話なども、子女の耳に入れては教育

上よろしからぬとの遠慮から、子供の居る時にはなるべく話さないやうにして居るとの事である。眞の立憲國の公德は家庭の中にも現はれてゐるが、日本の家庭は今になほ專制流儀が存在して、親がどんな無理をいつても、子女は絶對に之に服従せねばならぬことになつてゐるのは、片務の道德と謂はざるを得ない。日本も立憲國である以上、家庭にも立憲政治を行ひ、道理を以て家族を統治するやうに改良したいものである」云々。

これは座談には直接關係ない事柄ではあるが、目上の者が、目下の者に對し禮儀を守る、守らないは、どんな結果を及ぼすものであるかといふ參考までに抄録したのである。

自分より目下の者と對談する時は、單に言葉のみならず、其の話材についても十分に考慮せねばならぬ。なぜなれば、裏店の八公や熊公をつかまへて、世界の太勢や、現在の思想界を論じたところで、それは要するにチンプンカンに過ぎないからだ。

### 山岡鐵舟と清水の次郎長

幕臣山岡鐵舟は、俠客清水の次郎長の氣性を愛し、始終兄弟のやうに交際してゐた。



或日、突然、次郎長が鐵舟の家にやつて来た。

「先生、此の間は御書面を有難うございました。それについて私は考へました」と言つて鐵舟の顔を見守つた。

「何を考へたかな」

「いや、先生は劍道の達人で、天下の豪傑であつしやる。私などが兎や角申すのはをこがましいが、先生にも、ちつとばかり、えらくない所がございますね」

「こいつは面白い。どういふことが氣に入らんかな」

「申上げてみようござんすか」

「どうか、いつてくれ」

「ぢや、ぶちまけますが、此の間の御書面は、何が書いてあるか、私にはちんぷんかんぷん、ちつともわかりませんでした。ようござんすか、先生は學問がおありになる。さればといつて、相手の私にも、先生と同じやうに學問があると早合點なすつては困ります。此の間のお手紙は、先生と同格の、相當學問のおありになる方におあげになる御手紙で、私のやうな無筆同様の者に下さる御書面ではござんせぬ。此の見さかひがつかないやうぢや、先生もあんまり偉くないと思ひましたん

で、へい。先生、これから、私にお手紙を下さる時には、私にも分るやうな字で書いておくんなさい。矢鱈無性に四角い字を並べて下すつちや讀めません。人を見て法を説け、女に出す手紙は女に分るやうに、子供にやる手紙は子供にも讀めるやうに、相手々々によつて書きわけなくつちや、偉くも何ともないと思ひます」

「いや、よう分つた。面白い！ 見事一本参つたよ」

鐵舟はすつかり兜をぬいだ。それから、次郎長に送る手紙は、

「先日はありがたう。この品あげる。六月二十日、やまをか、清水の親玉へ」

といふやうに、やさしく書くことにつとめた。これは手紙の話だが、目下の者に對する座談の呼吸も同様だ。

### 「人を見て法を説け」

どうも人間には、自分を眞價以上に、偉く見せようとする傾向がある。そいつが、目下の者や年下の者に對する座談によく出て来る。何かかう、對者に分りさうもない、難かしい事を言つて、

ひとりで偉がつて見える悪い癖だ。ほんとに偉い人は、決してそんな真似をしないが、中途半端な者に却つてそれが多い。

言葉はなるべく丁寧にするがよい。といつて、ルンペンや日雇の労働者に、

「今日はたいへんいゝお天気でございますな。皆さんお變りもございませんか」

と、挨拶したらどうだらう。

「へん、馬鹿にするねえ！」

と、横すつぽの一つもはられねばしあはせである。

貧民學校に教鞭をとるかたはら、人事相談部の主任をして居た人の實話である。此の人毎日放課後に、子供の家庭を訪問するが、最初は勝手が分らないので非常に困つた。相手の人格を尊重する意味で、できるだけ丁寧な言葉を使つたが、先方は、さうされゝばさうされる程遠慮して、ちつとも打解けて話してくれない。其の中にだん／＼馴れるに従つて、彼等の気分も解つて來たので、

「やあ、今日は、どうだね、おかみさん、仕事があるかい」

といふやうな調子で話しかけると、相手もすぐにうちとけて、何でも思ふことを話してくれるやうになつた。

「その呼吸をのみこむまでには、私も随分苦心をしましたよ。彼等の言葉や気分を知るために、毎日、一ぜんめし屋に飛び込んで、彼等と一緒に食事をしながら研究したんですからね」

と、その人は述べ懐した。但し言葉はそんなさいでも真心で語りさへすれば、對者に反感を抱かせるやうな事はないものだ。四角四面に、左様然らばで、しやつちよこぼる事のみが禮儀ではないのだ。時には洒落もよからう、冗談もよからうが、對者を眼下に見下したり、馬鹿にしたりしてはいかぬ。どこまでも對者の人格を重んじ、打ち解けた態度で、言葉をくだいて語るのが、目下の者に對する座談の要領である。

### 三、答辯式座談

座談の中で、對者の質問に答へるばかりで、自分の方からは進んで何事も言ひ出さないといふのがある。答辯式座談とでも名づくべきであらう。其の代表的な場合は、入學試験や就職の際の、所謂口頭試問だ。

口頭試問は、多く常識試験であるとともに、人物試験である。どちらかといへば人物を見る方が主だ。筆記試験のやうに、解答が完全に出来たから、それでいゝとは限らない。聞かれたことをすらすらと答へることが出来たのに、なぜパスしなかつたかと不審がる人がある。常識試験といふものは、三に二をたして五といふやうな簡単なものではない。尋ねる方では、解答其のものよりも、その人の顔色、態度、言語等から観察して、其の人物の眞價を見抜かうとするのだ。

口頭試問で、先方が聞きもせぬことを、べら／＼喋るのは大禁物だ。多辯は失敗の基である。質問の解答は、最も簡潔に要領を得ることが肝心だ。

「あなたのお父さんは何をしておられますか」と尋ねられたとして、

「最初は会社へ出てをりましたが、会社の方は思はしくありませんので、役所へ出るやうになりました。しかしこの方も四五年で止めて、只今は商賣をしてをります」

と答へるものがあつたら、不合格請合だ。過ぎたるは及ばざるより遙かに悪い。

しかし聞かれたことだけは、決して臆することなく、最も明晰に答へねばならぬ。語尾の不明瞭なのは、其の人に自信のない證據で、最後のふんばりがきかないことを自白してゐるやうなものだ。

軍隊式とまでは行かなくとも、終りの一語までハッキリと、對者の耳に響かせるやうにしたいものだ。といつて角の立つた粗野な言葉はむろんいけない。おだやかで上品、齒ぎれのいゝ言葉でありたい。

言葉は、自己を表現するに最も都合のよいものである代りに、うつかりして、誤つた事を言つたり。餘計なことを言つたりすると、取返しがつかない事になる。口頭試問の際、あまり緊張し過ぎて、敬語の使用を取違へ、思はぬ失敗をする事はよくある例だ。

「あなたの御父さんは御健在ですか」

と問はれて「ハイ、父は」といふべき處を、ついつつかり「私のお父さんは」といつてしまふ。

甚だしいのは、

「あなたは、いつ御卒業になりましたか」

と質問されて、

「はい、去年御卒業になりました」

と自分の方に、「御」の字をつけて、あとで顔を赤くするなどの滑稽は、初心者によくあるものだ。心の落着を缺いてゐるなど、試験官に思はれる事は極めて損である。

## 四、就職戦術とその座談

就職は生活戦への第一歩である。希望通り就職出来た人は、先づ生涯の幸福の緒をつかんだのである。しかし今日のやうな時勢では、職業の好き嫌ひなど言つてゐる場合でない。何でもいゝ、仕事にありつくことが出来たら上乘であるが、それすらなか／＼の困難である。それだけに、就職戦術の巧拙が、重大性を帯びて来たのだ。どうしても就職しなければならぬ。これを逃してはならぬといふ必死の態度は結構であるが、其のためにビク／＼してはならない。度胸を据ゑて、對者の質問を十分に聞き、對者の顔色までも讀む位でなければならぬ。オド／＼すればする程、對者の質問にピツタリ来るやうな答が出来ないものである。

すべて答はハキ／＼して、決して逡巡疑してはならない。知らないことは知らないとせよ。自己の無知を笑はれることを怖れて、虚飾の言を弄するが如きは以つての外である。長所をきかれたら、謙遜を失はない程度で自信を示すがよい。

## 小學校長から官房主事

山本某といふ青年があつた。

僅か三十になるかならぬに、一小學校長から拔擢されて郡視學になつたが、其の才能を認めた知事が更に縣廳の方へ彼を引つばらうとした。

「君は、縣の方へ来る希望がないかね」

「行つてもよろしうございます」

「どういふ方面で働きたいと思ふか」

「僭越ですが、知事官房主事に任命していただけるなら、大いにやつて見たいと思ひます」

この答には知事もさすがに驚いたらしかつた。縣視學とでもいふなら格別、まるで違つた官房主事といふやうな重職が果して彼につとまるかどうかと、やゝ危ぶむ様子であつたが、自分を信ずる事篤き彼の申出は、遂に知事の心を動かした。

「よろしい、やつて見たまへ」

この一言で彼は、一躍、知事官房主事となつた。彼は勿論立派に其の仕事をやつてのけ、更に郡長となり。郡制廢止後實業界に打つて出て、今は押しも押されぬ大會社の重役となつて居る。それから、自己の短所をきかれたら、決してかくしてはいけない。正直に打ち明けた方が却つて信頼を得られるものだ。いくらかくしたつて長い間には分ることだ。一圖に採用されたいといふ一心から、嘘をつくのは、愚の愚、拙の拙なるものだ。

「こちらで今求めて居るのは、計算に達者なものといふ條件だが、君には出来るかね？」

「ハイ、その方なら、御期待を裏ぎらずにやり通せると思ひます」

と直ぐ答へられるなら申分ないが、もしそれが自分の不得意な注文であつたら、正直に、

「せつかくでございますが、その方面には自信がありません。併し外交、販賣の方ならば、相當自信もありますし、どんな苦しい事でもやり通す覚悟であります」

といつた方がいゝ。

就職の際は、あまりこちらからクドク希望を持ち出さず、「萬事お任せいたします」といふ態度をとる方が、先方に好感を興へるやうだ。給料なども、五圓や十圓のことで頑ばるのは策の得たるものでない。

初任給は五十圓だが、それでいゝかね」

「ハア、結構でございます。その代り、日ならず、御社として、最高限度の増俸をいたゞく決心です」

かうした應答は、時と場合、また人にもよりけりだが、こんな事が社長や重役の氣に入つて、メキキと出世した例はいくらもあらう。

## 一路邁進

來年はいよいよ卒業といふ年になつて、一年前から就職戰術を考へた學生があつた。彼の目的は満鐵であつた。官學と私學の入學試験を同時に受けて、兩方共パスした彼は、熟慮の結果、私學を選んだ程の變り者だけに、彼は學課の餘暇さへあれば満鐵の研究に熱中した。満鐵に關するあらゆる圖書を耽讀した。歴史、地理は勿論の事、日本の滿蒙政策から、満鐵の方針、施設、計畫等を、過、現、未の三段にわけて研究した。自分は何が故に満鐵を志願したか、いつからそこに着目したか、もし幸ひに入社したら、どの方面に働きたいか、自分の得意とする所は何か、自分の不得意と

する所はどこか、さういふ問題についても、十二分に考慮し、準備をして、いよいよ試験委員の前にあらはれたのである。委員の試問に對する彼の應答が水際だつて立派であつた事はいふまでもない。「うーむ、よくお調べになりましたな」

「ハイ、自分の終生の事業と思つて居りますから、できるだけ調べて見ました。將來もあくまで研究を続ける決心であります」

志願者數百人、卒業試験の成績表では、彼を凌ぐ者も澤山あつたが、試験委員は一致して彼を第一候補者として推選した。間もなく彼は入社のお知らせを受けて意氣揚々大連をさして出發した。

### 唯一のバックは母

學歴も、經歷も、手づるもない一青年が、突然、安田系の某大會社の募集に應じて、入社志願書をさし出した。

重役は形式的に、彼に面會した。重役は彼の履歴書を見ただけで、最初から彼を採用する氣はなかつたのである。

彼は、それを百も二百も合點であつた。

彼がどうかして重役の心に、この男には見所があるなと思はしめなければならぬと思つた。普通の志願者と、變つてゐるなと氣がついて貰へば、それだけでも大成功だと思つた。それを實現する唯一の道を、座談に選んだのである。

彼は重役の裏門から出入して、情實に絶る道を知らないではなかつた。しかし彼はそれを潔しとしなかつた。あくまで實力でぶつかつて、實力で立派に勝利を得ようと決心したので。

重役は、彼の履歴書を指先きでつまぐりながら、型通りの試問をはじめた。彼は一通りそれに答へた後でかう言つた。

「私は外の人のやうに、立派な學歴もなければ經歷もありません。また私を引立ててくれる有力な後おしもありません。併し私には何物にもかへ難い立派な後援者があります。それは外でもありません。私の母であります。

私の母は、私の小さい時に夫に離別し、私を頭に四人の子供を自分の手一つで養育してくれました。私は物心ついてから、學問こそなけれ、私の母は萬人にまさる偉い人だと思つて、尊敬して來ました。私ばかりではありません。私の弟妹も、皆さう思つて居ります。母は、

「父がないから駄目だ」といはれるのは、母親の恥辱だ。泉下の父に對しても申譯ない。どうぞお前達は、偉い人にならなくともいゝから、獨立自尊の人として、誰からも親愛される人になつてくれといつて、私達を勵ましてくれました。

私は、母の心を心として、全然人の世話にならずに、奮勵して夜勉強し、やつと今年夜學を卒業しました。學校の先生が或工場に世話してやらうといはれましたが、母に相談したら、寄らば大樹の蔭といふ諺がある。どうせ勤めるなら安田さんの會社に願つて見るといひます。私もなるほどと思ひました。私はこちらの會社の内容を出来るだけ詳しく調べました。私の入社志望は一層たかまりました。私は神佛に祈願して、どんな苦しくてもいゝから、安田さんの會社で働かう、働かしていただくかうと決心しました。今年いけなければ來年、來年いけなければ再來年、私は何十年でも目的を達するまで待たうと決心して居ります。私には學問も、經歷も、手引もありませんが、親譲りの健康と、誠心誠意、どんな仕事でも喜んでやれるといふ自信とがございます。見習でも雇員でも何でもよろしうございますから、試みに私を御使ひ下さいませんか。私の仕事つづりが御氣に召さなければ、いつ首になつても恨む處はありません。どうぞお願いいたします」

最初は、たかゞ夜學出の小僧が、何を言ひ出すかといふやうな顔をしてきて居た重役の眼は、

彼の舌の熱するにつれて見る／＼輝いて來た。彼が、臆する所なく自信を發表し、此の世の中で一番偉い女と信じて居る母を語り、その母の助言によつて此の會社を目ざして來た徑路をのべ、あくまでその目的を貫徹せんとする不屈不撓の精神を披瀝するに及んで、重役の顔色は、次第に驚異から讚嘆に變つて來た、重役は葉卷の灰が洋服の袖に落ちたのも知らずに、彼の陳述を傾聽して居たが、やがて靜かに椅子から立ちあがつて、

「よく分りました。君に入社を願へるかどうかは、私一存では明言出來ないが、君のお母さんが、特に會社を名ざして、君をすゝめられた好意と、獨立自尊の君の精神は、當局の人達に私からよろしく申傳へます。今日は御苦勞でした。お母さんによろしく言つて下さい」

と重役はかういつて彼を戸口まで送り出した。

此の青年の就職戦術は立派に成功した。間もなく彼は、會社から、「何月何日まで御出社下され度」といふ通知を受取つて、文字通りに欣喜雀躍した。賢き彼の母親は、その通知書を亡夫の靈前に供へて合掌落涙した。爾來二十年、彼は累進また累進、遂に重役待遇を勝ち得て、現に同社の中樞人物となつて居る。

## 五、職業的座談

人間が此世に生活してゐる以上、何かしら働かねばならぬ。會社員、銀行員、官吏、それら職業を持つてゐる筈だ。従つて日常座談の大半は、職業的會話であるというても差支へはない。よし、其の座談の話題が、職業上の問題でなくとも、互の胸には、常住、職業的意識が潜在してゐると勿論だ。商人の買客に對する、醫師の患者に對する、或ひは警察官の民衆に對する等の場合、自然職業的色彩が、會話の上に現はれて來るものだ。いづれにしろ、職業的會話が巧みに出來るといふことは、處世上の一要件だ。それが出來ない人は、たとひどれほどの實力があつても、とかく人に遅れ勝ちで、悪くすると社會の落伍者となる虞がある。

學校は優秀な成績で卒業しても、さて實際的生活の第一線に立つた場合、職業的會話がろくに出來ないとなると非常に損だ。確かに將來の成功の大きな障害となる。森本厚吉博士の著「話方の經濟」の中にもかう書いてある。

「最近、法律家、醫師、宗教家等にして、其の専門的知識は優秀なるにも拘らず、其の知識又は技術を表示する適當なる方法を知らないために、成功する事の出來ない者が少くないといふ事實が現はれて來た。それで近來歐米の専門學校に於ては、必須課目又は隨意課目として、話方の講座を設け、又特別な手段を講じて、職業會話の練習に努力を拂ふやうになつたのである」云々。

我が國でも、近來實生活に即した教育といふことが強く叫ばれて來たが、單に職業的知識、技能を授けるといふばかりでなく、それを充分に生かして働かせるための職業會話、職業的座談の練習もやつて貰ひたいものである。

## 商戰の武器

如何なる職業にも、座談は重要な戰術の一つとして、ゆるかせに出來ない事は屢々記述した。殊に商人にとつては、商業會話ともいふべき座談が、販賣術の殆ど全部をしめてゐるといつても過言ではないと思ふ。商賣繁昌の裏面には、必ず座談上手の店主又は店員が控へてゐるに違ひない。客扱ひの上手な店といふのは、言ひかへれば座談上手の手ぞろひだといふ事になる。



初めて滿洲に行つた者は、誰しも先づ日本の勢力の偉大なるに驚くが、仔細に觀察すると、それは單に表面だけで、實權は依然支那人の手に握られて居るのを見て悲觀する。滿洲の日本人は、概して働かずに威張つてゐる。實際に働くのは支那人である。それが抑と間違ひのもとだ。折角滿鐵が巨費を投じて、各種の事業を經營しても、儲けた金をみんな支那人に吸ひ取られてしまつたら何にもならぬ。大連はどうだ。安東はどうだ。奉天はどうだ。長春はどうだ。滿鐵沿線の各地に於ける商業の實權は、悉く支那人の手にあるではないか。日本人の店は一向繁昌しないのに、支那人の店にはお客が雲集する。日本人でさへ、同胞の經營する店で買はずに、支那人の店から買ふのは何のためか？

一言につくせば支那人は商賣上手だからである。品質や値段に高下はなくても、彼等の客扱ひには格段の巧妙さがある。支那人の商店に入つて見ると解る。實に愛想がいゝ。

「いらつしやい、今日、いゝお天氣、あります。おかけなさい。何上げますか」

始終ニコ／＼して、まんべんなくおあいそをふりまいてゐる。よし買はずに店を出ようとも決していやな顔を見せない。それが、一寸日本の商人には眞似られない點だ。尤も内地の大百貨店ではそんなことはないが、個人商店では、客が買はずに歸ると、非常に不愉快さうな顔をする。そんな

ことでは到底商賣が繁昌するわけがない。客は二度と來る氣がしなくなる。買はないお客にも愛嬌を賣れ。之が商賣繁昌のモットーだ。露天商人が、

「さあ、遠慮なく御覽下さい。品物を見たらからつて、是非買つて下さいといふのではない」

などとよくやつてゐるが、一般の商店でも此の氣持で、毎日お客に迎接すれば、商賣繁昌疑ひなしだ。冷かし半分のお客も、二度、三度となると、つい愛嬌や座談に釣られて、一品二品と買つて歸る事になる。それが縁で、大切な福の神様をつかまへる事がないとも限らない。

### 客によりて態度をかへるな

中には店によりて、買物の高が少いと、ぞんざいに取扱ふ所がある。これなども商賣冥利を知らざる大馬鹿で、買物の金高が、たとひどんなに少くても、やはり心から、

「どうも毎度ありがたう存じます」

と感謝せねばならぬ。金額の多寡や客によりて、待遇に差別をつけてはならぬ。いくら澤山買つてくれたからといつて、店中へイコラ／＼して、

「毎度どうもありがとうございました。お品は後程直ぐにお宅までお届け致します。旦那様のやうに、いつも奥様や御子様方のためにお土産をお求めになつてお歸りになる方は珍しうございますよ。こんなよい、御親切な旦那様をお持ち遊ばした奥様のおしあはせは申上げるまでもなく、坊ちゃんやお嬢様方も、毎日どんなにか旦那様の御歸りをお待ちになつて居る事でございます」

などと、齒の浮くやうなお世辭を、他の客がきいたら何と思ふだらう。五錢、十錢の客は決して、氣持しないにきまつてゐる。百圓の客を一人捉へるために、十錢の客を千人逃すのは、店のさびれる基である。

### 上原大將と家具屋

上原大將が或る時芝の某家具店に、自動車を乗りつけた。好客御参なれとばかり、店員共はドヤドヤと店頭で飛んで出たが、車中から降り立つた大將の姿を見ると、急にゲツソリした。それもそ

の筈、大將のその日のいでたちは、眞岡木綿の黒紋附に、小倉の袴といふ、どう高く見積つても、僻村の村長以上にはふめない代物と睨んだから、店員共の態度は急に横柄になつた。そこへ主人が出て来て、

「どちら様のお使ひで？」

と、極めて無愛想な態度で應對した。大將は委細かまはず、必要な品々を注文して歸邸したが、待てど暮せど注文の品が届かないばかりか、何の音沙汰もない。とう／＼それつきり、大將の姿は家具店へあらはれなかつたといふ逸話がある。後になつて店の主人や店員が、其の客が雷名天下に高き上原大將と知つて、どんなにくやしがつたか、どんなに後悔し恐縮したかは、蛇足を添へる必要はあるまい。

多数商店の中には、日本人なら誰にも親切にするくせに、朝鮮人の労働者と見ると、ぞんざいな口の利き方をする店がある。

「これ何ぼか？」

「それか、二十五錢だよ、上等だよ、買つて行きな」

といふ。不心得も甚だしい。

## 損して得とれ

「お店に何々はありますか」

ときかれた時、生憎その品がなかつた場合にも、

「ありません！」と、ぶつきら棒にいつてはいけなす。

「どうもお生憎様で、一寸只今切らして居りますが、すぐ取り寄せますから明日までお待ち願はれますまいか」

といふふうには、どこくまでも客を逃さないやうにくとしむけるのが商賣の秘訣である。それが全然自分の店で取扱はない商品なら、一應他の品ではお間に合ひませんかときいて、どうしてもその品でなければといはれたら、

「まことに御氣の毒様でございます。手前どもではその御品は取扱つて居りませんので。——ここから何軒目の何々屋さんでおきよを願ひたう存じます」

と教へてやるだけの親切があつてほしい。ちよつと考へると、他店の提灯持ちをするやうなもの

で、ばかしく感ずるかも知れないが、その實、共存共榮の大義に叶ひ、いつかそれが、百倍

千倍となつて、自店に歸つて來るものである。或人は、

「商品を賣らうとあせるよりも、親切を賣物にしる。その方が遙かに賢いやり方だ」

といつた。それが商人の金科玉條だ。

「これを買ひたいと思ふが」

と客の手を出した品物が、どこかに缺點があつて、賣れ残つた品であつた場合、賣り拂ふのよ

いしほ時だと思つても、一應は、

「お買ひ下さるの結構で御座いますが、實はその品は、これくの缺點があつて、あまりおすゝ

め出來ないので御座いますが、もしおよろしかつたら、幾らくに御まけ致して置ませう」

と其の理由を説明してやるのが本當だ。店主なり店員なりに、これだけの親切があれば、客が品物を取り換へに來た時にも、何か理由があつてそれを返しに來た時にも、客の氣をそらさずに、親切第一で接客する事が出來るであらう。商賣の上手下手は、こんな場合によくあらはれるものだ。

買った品物を返したり、別の品物とかへて貰はうと思つて來る時には、客の方でも多少氣の毒だといふ感じがあるので、

「すみませんが、これを取換へていただけないうせうか。少し宅の子供には小さ過ぎるやうです  
から」

といふふうには、下手に出て来るものだ。その時、

「オヤ、さうでございましたか。え、よろしうございますとも。さういへばお宅のお坊ちやまはよ  
くお太りで御座いましたからな、早速お取換致しませう」

とか、

「それはお氣の毒様でございます。お氣に召すのがなくて相済みません。又、どうぞお願ひ致し  
ます」

といふやうに、懇切を極めた挨拶をすると、客の方でも、心より感謝して、どんな小さな品物で  
もその店で買ふやうになる。

或人が十數年前、大阪の某時計店で懐中時計を買つたが、どうも氣に入らないで、二三日経つて  
から返しに行くと、店員はさも氣の毒さうに、

「何とも申譯ありません。又お氣に召す品がありましたらどうぞ」

と云つて、快く現金で返して呉れたばかりか、それ以來、毎月時計のカタログを送つてくれる。

暑中の見舞や、寒中の見舞の葉書までよこす。その人はすっかりその店の虜になつてしまつて、誰  
か時計がほしいと云へば、直ぐその店を紹介するやうになつた。

「商賣のコツはこれだねえ」

と、今でもその男は感服して話して居る。

### お客の叱言は良薬と思へ

お客によつては、氣に入らないことがあると、頭から店員を叱りつける人がある。デパートの食  
堂などでよく見受けることだ。

「おい、どうした、もう注文してから十分にもなるぜ。出来ないのかい」

晝時はどこでも混雑してゐる最中だ。

「ヘン、お客は一人ぢやないんだよ。少しは店員の身にもなつて見るがいゝや」

と腹の立つ場合があつても、決してお客に理窟をならべたり、言争ひをしたりしてはならぬ。

「だつて、こんなに混んでゐるんですもの、少し待つて下さいな」

とでも言はうものならおしまひだ。心すべき事である。

商品に對する叱言でも同じ事だ。お客の叱言は良薬だと思つて耳を傾けよ。叱言をいはれるのはどこかに缺陷があるからだと思つたら、決して腹の立つ筈はない。

お客の叱言は感謝して聞くべしだが、主人や番頭が、客のゐる前で店員にツベコベ叱言を言ふのは不愉快なものだ。

「これ長松、早く包んで差上げないか、何を愚圖々々してゐるんだね」

お客へお愛想のつもりで、小僧を叱る主人がある。全く見當ちがひのやり方だ。そんな場合、小僧の方をむいて、

「丁寧に包んで上げるんだよ」

とやさしく注意し、

「どうも御待ち遠さま、ただ今すぐお包み致します、

と御客に挨拶したら、お客の方でもどんなにいゝ感じを持つかわからない。注意された店員が馬鹿でない限り、間接に自分が「早くしろよ」といはれてゐるのだ位は氣がつくだらう。店の繁榮の基は、お客には勿論、店員に對しても親切第一。桃李言はず、花下自ら蹊をなすの道理、親切な

店には知らず／＼客が集る。平凡なやうだが、これが商賣の極意である。

## 六、金錢貸借の座談

「地獄の沙汰も金次第」の世の中である。現在のやうに、經濟が生活の中心となつて居る時代において、金錢問題を中心としての座談の機會が多いのは當然である。金錢問題は、時に親子兄弟夫婦の關係を割き、竹馬の友をも仇敵にすることさへある。出来るなら、どんなに親しい間でも、金錢の貸借を慎しみたい。しかし現實の生活に於ては、絶対に貸さぬ。借りぬとばかり言つてゐられぬ場合がある。そこで貸すにも借りるにも呼吸が要るのだ。

### 好意が仇となつた實例

金を借りに来るからには、困つてゐるのだ。金が必要なのだ。それに對して、快く貸してやるこ

とは親切のやうにも思へるが、時と場合によりては不親切に當る事がないとも限らぬ。貸した金が飛んでもない禍の種を蒔くことがあるからだ。好意が仇となる。

K氏が十数年前まだ東京の郊外にくすぶつて居た時代、近所に非常に人のいゝ老夫婦が住つてゐた。いつの頃よりか互に親密に交際し合ふやうになつて、K氏の一家が不在になる時など、よく留守を頼んだりして居た。ところがだん／＼生活に困つて來たらしく、時々老人がこぼし話をはじめるので、Kの細君が氣の毒に思つて、何かと持つて行つてやつたりした。

すると或る日、其の老人がKの家へ來て、いひにくさうに、

「まことに申兼ねますが、どうかほんの四五日の間、お金を十圓ばかり拜借したいのですが」

といふ。

「承知しました。困る時はお互ひですからお立替へ致しませう」

といつて直ちに貸してやつた。老人は非常に喜んで

「きつと、四五日中にはお返しいたしますから」

といつて歸つたが、あてにしたものが入らなかつたと見えて、四五日はおろか、幾日経つても返りに來ない。Kは、無論返して貰はうと思はないし、催促する氣もなかつたが、きちやうめんな

老夫婦は、それ以來Kの家族に顔をあはせるのが氣まりが悪いとでも思つたか、途中で出會つてもあわてゝ避けて通るやうになつたばかりか、ふつたりKの家へ來なくなつた。一度こちらから訪ねて行つて、

「あれしきのお金のことなぞ氣にかけてはいけませんよ」といつてやつたが、

「すみません」

の一點張りでもどうしてもやつて來ない。Kも氣まりの悪ひ思ひをさせてはと考へて、あまり立寄りたくないやうにしたので、それつきり交際が絶えてしまつた。これはほんの一例に過ぎないが、親しい間柄でも、金の借貸をするのが怖い。貸した金がかへらない爲めではない。先方が返せない場合、それがもとでこれまでの親交が破壊される虞れがあるからである。

## 二種の借金

一口に借金といつても、いろ／＼種類がある。

第一種は經常費、生活費に不足を生じた場合の借金で、失職、病氣、思ひがけない災禍等のため

に生じた臨時の借金ならまだ恕すべき點もあり、返すべきあてもあるが、遊蕩、逸樂、賭博、又は法外の冗費等がもとで、不義理に不義理を重ね、どうにもならなくなつたあげくの借金には、一點同情すべき點なく、返すべきあてもないものだ。

第二種は、職業上の借金で、業務を擴張したいが、資金が足りないとか、もう少し流動資金が充實すれば、更に商賣が有利に發展するといふやうな場合の借金で、これは借りる方にとりて取でもなければ屈辱でもない。目的が立派であり、成算さへたつて居れば、いくら借りても差支ない借金である。子供に學費を貢ぐための借金も此の部類に入れてよからう。返すめあてのある借金は、いゝが、みす／＼返すあてのない借金をする事は、自ら進んで破滅の淵に足をふみこむやうなもので、愚の骨頂である。

といつて金銭の貸借といふものは、私達が考へて居るやうに、さう簡單に廢止するわけにゆかぬものらしい。人といふものは、いづどんな事で金子の用に迫られないものでもないからだ。

### 上手な借り方、下手な貸方

そこで、借主貸主が必ず直面する第一の問題は、いかにすれば快く金を貸して貰へるかであり、どうしたならば貸した金をきれいに返して貰へるかである。金銭貸借に關する座談のむづかしい點はそこにある。

何しろ世智がらゐ世の中だ。金を借りる以上、返済期限と利息をきめて、借用證書を貸主に入ねばならぬ。昔のやうに、

「萬一返済せざるに於ては、満座の中にてお笑ひ下され度く候」

では、今日の貸主は承知しまし。また承知される筈もない。借りる時の佛顔、返す時の閻魔顔で、一旦借りたとなると、仲々返しにくいものだからである。

それを取立てようとするには、一通りならぬ苦心が要る。貸したものだから、返して貰ふのはあたりまへだ。誰に遠慮があるものかといふ調子で、味もそつけもなく、「いつかの金子、丁度期限ですから、元利とも拂つていただきますせう」

などと強く出ようものなら、却つて、

「そんな催促の仕方があるか。まるで高利貸の手代見たいに……。ばかにするな」と逆ねちをくはされるにきまつて居る。傳家の寶刀は容易に抜くものではない。

### 催促の仕方

物を貸して催促をする事はいやなものだが、どうしても止むを得ない時には。あくまで穏かに、情に訴へるやうにした方が、多くの場合得策のやうである。

「あなたの方の御事情も重々御同情申し上げますが、實は私の方も目下火の車なんですね。此の際多少でもお返しいたゞけましたら、何とか挽回出来るかと存じますので、全部とは申しませぬ。せめて半額だけでも、何とか御工面願へないでございませうか」

「いや、お拂ひ致したいのは山々ですが、御承知の通りの不景氣でございませう、すつかりやられましてね……」

「御尤もです。昨今の不景氣は全くひどいですからね。ふだんなら私の方でも、こればかりの金を

御催促なんかいたしたくないのですが、今度といふ今度は全く油がきれてしまひましてね。二進も三進も動けなくなりましたので、御無理を願ひにあがつた次第です」

情理を盡し先方の顔もたて、こちらの窮境も訴へて催促すれば、心のある人なら、それでもとは強辯し兼ねるものだ。たとひ僅かでも、返済しようといふ氣になるのは人情である。これは普通の貸借關係である。

借りた金が返せぬのは、困つてゐるからである。最初から踏み倒す積りでかゝつた不徳漢は論外であるが、さうでない人でも、困ると妙にひねくれて出るものだ。俗に無い袖はふれぬといひ、無い程強いものはないといふ。あまり強く取立てようとすると、借主の方でも反抗心を起し、「それまで待てないといふんなら、どうでも勝手にするがいゝや」といふ事になる。さうなるともう挺子でも動かなくなる。力より情に訴へよ。これが最善の策だ。

### 借り方いろく

今度は、金を借りる身になつて考へて見る。理想としては借りないに越した事はないが、どうし



ても、さうゆかない場合がある。

殊に第二種の借金——商人のやうに、一定の金を始終運轉させて、これで商賣してゐる者には、時に、借金が財産になる場合が少くない。借金も多額になると、貸主の方でも、ふまれては大變だから、つとめてこれを庇護する事になるからだ。然らば金を借りるには、どうしたらよからうか。これが中々むづかしい。

一口に借金といつても、銀行から借りるのもあれば、高利貸から借りるのもあり、友人知己或は同業者から借りる場合もある。相當の抵當品があつて、それに相當する額を銀行會社から借りるのはわけもないが、信用の貸借は最もむづかしい。

それについてこんな滑稽な話がある。ある男が、郷里の先輩から、少々金を借りたいと思つて訪ねて行つたが、ふと、同家の夫人が、非常な愛犬家で、食事も入浴も犬と一緒にして居るといふ話を思ひ出し、「將を獲んと欲すれば先づ其の馬を射よ」の兵法から考へついで、取次に出た夫人の顔を見るや、早速、玄關に寝てゐた犬の顔を撫で、

「實にいゝ犬でございますな」

とお世辭をいつた。頭を撫でられて犬もだまつて居るわけにゆかぬと思つたか、むつくと起き上

るなり男の口をペロリとなめた。生來犬が大嫌ひの其の男は、氣持が悪くてたまらないが、こゝが辛抱の仕處だと思つて、一所懸命にがまんをして居ると、犬はいゝ氣になつて、ところきはすべロリ／＼と舐める。夫人が、それを見て女中を呼び、

「これお鍋や、含嗽水を持つておいで」

といひつけた。

「いえ、何、決して御心配には及びません。私は犬が大好きでございますから」

といふと、夫人は、クスリと笑つて、

「あら、あなたの爲めではありませんよ」

といひながら、犬の口を何度も何度も洗つてやり、

「これで、やつときれいになつたね」

といつたので、さすがの男も呆れ果て、金の話どころか、這々の體で逃げ出したといふことである。借金するには、こんな馬鹿々々しい苦痛も嘗めなければならぬと思つたら、夢々金を粗末にしない事だ。

## 單刀直入がよい

知り合の仲なら、よく事情を打ち明けて頼むのが、無策のやうで最も賢い方法だ。その場合、忘れてならないのは、先方に行つたら眞先にそれを持ち出すことだ。誰しもさうした問題は、きり出しにくいので、まはりくどい間接射撃をやりたがるものだが、これは多くの場合失敗する。

「お宅では皆さん、お變りありませんか」

「ありがたうございます。お蔭で皆丈夫です。お宅では？」

「はッ、私の方は近頃災難つきでございましてね、次から次と病人が絶えませず、困つてをります」

「さうですか。それはどうも」

「それに商賣の方もあがつたりで、貸した品物の代金は取れず、泣き面に蜂といふところです。此の際少しの融通がきますれば、何とか切り抜けて行けるのですが……」

「は、あ、金を借りに来たな」

と見抜いてしまふ。それを見ぬかれたらおしまひだ。

「いや、全く此の不景氣には弱りましたな。私の方も御同様で、此の儘ではどうにも動きがとれませんので、何とか少し資金を融通して貰ひたいと思ひまして、二三心あたりの處にあたつて見ましたが、駄目ですな。どこでも、あべこべに逆襲ですよ。仕方がないから、こんな時には蛙の冬眠をまねて、じつとして居るんですね」

かう先手を打たれてしまつたら、手も足も出なくなる。結局、肝心の用向も言出せず、しをく歸る外はない。こんな時には一か八か當つて碎けるの筆法で、單刀直入式に「實はこれ〜で」ときり出した方がよいやうに思ふ。結論を先に、理由は後で述べるのだ。

對者にもよるが、金を借りにゆくには、あまり見苦しい服装をしてると嫌はれる。

「あんな貧乏くさい人に貸したら、金輪際返してはくれまい」と思はせるからだ。

「時に如何でせう、お手許に遊んでゐる金がありましたら、少し融通していただけませんかな。實は仕事の方はトン／＼拍子に進んでゐるのですが、何分にも流動資金が手薄でしてね。一寸行詰り

の體なんです。御無理を願つてすみませんが、こゝで一つお助け願へると有難いですが……」  
 自分の弱味を見せず、對者に内兜を見透されぬやうに、手軽く何でもないやうにいつてのけるのも一つの方法だ。

## 返濟できなかつた場合

借りた金は勿論返濟しなければならぬ。けれども人間には何時どんな災厄が降つて來ないとも限らぬ。あてにした金が入らない爲めに、返すべき金も返せぬやうな羽目に陥る事はよくあるものだ。横着で返さぬのは論外だが、どうしても返し得ないなら、其の事情を訴へて、對者の同情と理解を得る外はない。

詩人サイン・フォイキが金の無いのに困つて、或る猶太人から二百圓を融通して貰つたが、期限が來ても返すことが出來ない。猶太人は矢のやうに督促する。何と辯解しても聞き入れてくれないので、詩人はすっかり弱つてしまつた。

或る日フォイキが床屋に行つて、髭を剃らうとしてゐるところへ、突然例の猶太人がやつて來て、

こゝで會つたが百年目といはんばかりに、人前も憚らず口汚く言罵り、さア返せ、今返せと矢の催促、床屋の親爺が見るに見兼ねて、

「まあ、旦那が髭を剃つてしまふまで、お待ちになつてもいゝでせう」

と仲裁したので、流石の猶太人も不承々々に、

「では髭を剃るまで待ちませう」

といふと、詩人は得たりと、

「君は確かに、僕が髭を剃り了るまで待つといつたね」

と駄目を押して、改めて床屋の親爺に向ひ、

「君が其の證人だよ」

といひさま、剃りかけた髭をそのままにして、さつさと床屋を飛出してしまつた。

痛快な話である。對者が猶太人では、此の位の芝居を打たねば助かる道はあるまい。しかしこんなことは詩人フォイキにして出來たことだ。萬人が眞似るべきことではない。あこぎな高利貸にでも引ツかゝつたのなら格別、借りた物を返さないのはこつちが悪いのだ、威張れた義理ではない。誠意を披瀝して懇願すれば、對者も、それでもとはいふまい。しかし約束した以上、出來るなら、

十分の一でも百分の一でも返済するがよい。

「全く申譯もございません。漸くこれだけ工面致しましたから、どうか今日はこれで御容赦願ひたく存じます」

かういはれると、貸した方でも、此の人は横着で約束通り拂はないのではない、拂ひたくても拂へないのだ、今に出来さへすれば全部返済してくれる人だと思ふから、安心もし、同情もする。

もしその場合、どうしても拂へないといつたら、貸主は、

「それでは、いつ返して、いたゞけませうか」

といふに相違ない。

其の時に、何日後には必ず入金するといふあてがあるなら、拂ひ得ると信ずる日取を知らせて置くことが禮であるが、それも不確である場合には、一時のがれに出鱈目な期日を約束せずに、

「ハイ、何日頃までには必ず出来るつもりですが、萬一出来ない時には、あなたに嘘をつくことになり、無駄足をふんでいたゞくことにもなりますから、期日の方はお約束が致し兼ねます。その代りいくらでも出来ましたら、明日にも必ずこちらから持参致しますから、どうか今しばらく御猶豫いたゞきたうございます」

かう情を盡して歎願した方が、先方も却つて氣持よく受け容れてくれるであらう。借金取が來たからとて居留守を使ふが如きは、最も卑怯なやり方である。

## 七、異性間の座談

「男女七歳にして席を同じうせず」といはれたのは昔のこと、今では、男女交際の道が開けて、女性も一個の社會人として立派にその人格と存在とを認められるやうになり、男女間に、公然座談を交へる機会がだん／＼多くなつて來た。それだけに、異性間に於ける座談の研究が必要になつて來たのである。

問題は「男性は女性に對して如何に語るべきか」「女性は男性に對して如何に語るべきか」である。數千の荒くれ男を相手に、二時間も三時間も滔々と辯じ立てる雄辯家が、必ずしも婦人の前でもその通りだと断じ得ない。それどころか、女の前に出ると、何から話し出していか見當がつかず、顔を赤くしてまご／＼するやうな人が存外多いものだ。女性とても同様だ。現代の男子、女

子ともあらうものが、異性の前で口が利けないやうでは、それこそ時勢に遅れてしまふ。  
 女性と語るには、先づ女性を知らなければならぬ。それが先決問題だ。しかし一口に女性といつても、妙齡の乙女もあれば、皺くちやのお婆さんもある。令夫人もあればオールドミスもあり、頭の進んだ婦人もあれば、古い型の女もある。その顔が違ふやうに性格も違ふ。それを一々知るといふ事は、容易な事ではないが、大抵の女性には女性としての共通點があるものだ。

### 女性の共通點は何か

女性は男性に比して著しく感情的である。二三の例外があるにしても、概して女性は情に動かされ易い。喜怒哀樂を顔に表すことが多い。女性は何でもないことにも、よく笑ふ。殊に若い女性はよく笑ふ。男子には何のをかしみもないやうなことにも、彼女等は腹を抱へて笑ふのである。同時に彼女等は、何かといふと直ぐに泣く。ボロ／＼涙をこぼしてす／＼泣く。一寸可哀さうな話を聞いても涙ぐむ。女性と談話を交へるには、第一に此の點に注意しなければならぬ。何でもない事にキヤア／＼いつて笑ふかと思ふと、つまらぬ事に腹を立て、くやし涙をボロボ

口こぼす。その代り、こちらが、しんみりと誠意を披瀝して話せば、人一倍心を動かされる。

「女と子供は、おだてれば火の中へでも飛び込む」といふ警句は、少々女性を侮辱した言葉かも知れないが、確かにお世辭とおだての利く點では、男子よりも女性の方が遙かに上である。

「あなたは、お年よりすつとお若く見えますね」

といはれると、もう此の世に未練がなさうなお婆さんまでも喜ぶ。殊に若い女性は、非常に年を氣にする。

「あなたのお年は？」

ときいても、なか／＼すぐに返事をしない。

「あてゝ見ませうか、二十五六といふところですね」

それが、ちやんと當つてゐても、彼女はあまり喜ばない。間違つても、本當の年より若く見られると嬉しがるものだ。

## 行商人の頓智

誰かの漫畫に、こんなのがあつた。

專賣特許品の行商人が、門口から案内を乞うた。奥さんが取次に出る。

「あの、奥さんはお在宅でございませうか」

奥さんはツンとして、

「何か御用ですか？」

「いえ、あの、奥さんはお留守でございませうか？」

奥さんの御機嫌は、いよ／＼斜めとなつた。

「此の人はきつと、私を女中と間違へてゐるんだよ」

と思つたから、ムカ／＼となつて、

「私在家内ですよ、何か御用ですか？」

「えッ、あなた様が奥様？ 本當でございませうか？」

「まあいやだ！ 私を女中とでも間違へたんですか？」

「いゝえ、とんでもない！」

行商人は仰山にベコ／＼と頭をさげて、しよつて来た荷物の紐を解きながら、

「まあさうでございましたか。失禮を申し上げます。實は奥様があまりお若く、お美しくみらつし

やるんで、私、お嬢様だとばかり早のみこみをしたものですから、何とも申譯ございません」

此の一言で、奥さんの御機嫌がカラリと直つた。曇勝小雨、後晴といふ處だ。

「オホ、、、まあさうでしたの。ホ、、、。そしてそれは何ですの？ 何か要るものがあつた

ら買ひませう」

うまく女性心理の機微をつかまへた處に、此の行商人の頭のよさがある。

## 女性の標準

しかし誤解してはならぬ。すべての女性がお世辭上手な男子を好むといふのではない。否、知識階級の女性は、あまり見えすいた空世辭を使ふ男子に對しては、却つて反感を持つ場合が多いから

だ。何事にもさうであるが、女性との交際、女性相手の座談には中庸、——程のよいといふことが大切である。

服装でもさうだ。着物の襟が脂と垢でピカ／＼光つてゐたり、ズボンや上衣が處々破けてゐるといふやうな、ふしだらな身なりは、女性の喜ぶところではないが、しかしあまりハイカラ過ぎたり、にやけた服装をしてゐる男子も、まじめな女性の好意を勝ち得る所以ではない。女性にやさしく親切にするのはいゝが、あまりぺこ／＼頭を下げると、女性に好かれるどころか、却つて輕侮を招くものだ。

近頃は、女性の社會的地位が著しく向上し、教養のレベルも一般に高くなつた事は事實だが、全部の女性がさうだとは言ひかねる。だから普通の家庭婦人に對しては、あまりむづかしい話は禁物である。抽象的な話や、専門的な話はなるべく避ける方がいゝ。何といつても女性文化は男子に比してまだ／＼程度が低いからである。育児や消費經濟の話、臺所や料理の話、その折々の流行の話、さては新聞の三面記事といつたやうな話題に心をひかれるのが、多數女性の現状である。

女性には嫉妬心がある。男子にも無論あるが、女性の方が遙かに強い。だから男子が女性の前で、他の女性のことを、あまり褒めちぎる事は禁物である。殊に未婚の女性に對しては、注意せねばな

らぬ。不用意の言動は、兩性の間に、超える事のできない溝をきづく事があるからだ。

女性は男子にとつては、たしかに一つの謎である。女性とは如何なる者ぞ、其の正體をつかまな  
いでは、彼女等と本當の交際は出来ない。まして今日はスピード時代である。女性の心境も刻々に  
變化し、進歩する。今日の女性にはどんな話題が喜ばれるか、それも彼女等の心とともに移つて行  
くことを心しなければならぬ。

## 八、師弟の座談

佐々木邦氏の「凡人傳」といふ小説に、高木、野崎、河原の三青年が、落第した同級生に同情し  
て、卒業式に出席しない爲め貰へなかつた卒業證書を、翌日總理のジョンソン博士に貰ひに行つた  
一節がある。

翌朝、私達三人は、總理ジョンソン博士の登校を寄宿舎の窓から見極めて置いて、總理室の戸を

叩いた。

「お入り」と返辭があつた。

「お早うございます」と三人、直立不動の姿勢をした。

「我儘息子達、来たか？」

「……………」

「どうして来たか？」と、博士は憤つてゐるやうだつた。

「申譯ありません。お詫に上りました」と、私が代表した。

「宜しい。心配いらん」

「先生、僕達は卒業證書を戴けませんでせうか」

「あれは差上げられません」

「先生」

「あれは卒業式に來ない人、欲しくないからでせう」

「いゝえ、欲しくて上りました」

「この机の引出にありますが、神様の思召、仕方ないです。式を休んで皆々に、迷惑をかける者、

これから先もあります。差上げると、總理、監督できません」

「……………」

「差上げません。その代り、今、此の窓から捨てます」

「……………」

「紙屑拾ひ、泥棒ではありません」

「はア」

「差上げません。捨てます。分りましたか？ 紙屑拾ひ、泥棒ではありません。早くお歸りなさい」

と命じて、總理は立上つた。私達はお辭儀をするが早い、校庭へ下りて待つてゐた。二階の窓

が開いて、卒業證書が三枚ヒラ／＼と舞つて來た。

師弟の情誼はまさにかくあるべし。かうした座談は、第三者がきいても嬉しいものだ。そのジョ  
ンソン博士が、就職に悩んでゐる卒業生に對して諭す所が更に面白い。

「探して御覽なさい。求めよ、さらば與へられん。門を叩けよ、さらば開かれん」



「はあ」

「此の明治學園、神さまの道、教へるの學校。基督教紳士、組立ての學校」

「……………」

「この學校の卒業生、學門忘れてよろしい。しかし、忘れてならないこと一つあります。それ何でありますか？」

「……………」

「金貧乏、それ、恥でない。人格貧乏、それ、一番いけない。野崎さん、どうですか？」

「はあ」

「基督、金貧乏でありました。大へんに金貧乏でありました。『狐は穴あり、空の鳥は巢あり。されど人の子は枕するところなし』しかし人格貧乏ではありません。私達、皆小さき基督。金貧乏、それ恥ではない。人格貧乏、それ一番いけない。河原さん、分りましたか？」

「普通の就職者對需要者の座談としたら、いはゆる「パンを求むる者に石を與ふるもの」で、氣の早い者にはピンと來るかも知れないが、恩師として子弟にのぞむ場合、かうした訓戒は職業以上

に大切な糧だ。

押川方義氏が東北學院を主宰してゐた時代、氏の盛名を嫉む斗筭の輩が、新聞雜誌を利用して、さかんに悪聲を放つた事がある。曰く強盜、曰く強姦、曰く詐欺、曰く横領、……こゝまで來ると學生も惑はざるを得ない。學園内にもいろ／＼の噂がたつた。しかし押川氏は、一言も辯解がましい事はいはなかつた。

或日、神學部の學生で、激情家を以て鳴る某が押川氏を訪ひ、開き直つて、

「先生、かういふ噂があります。實に心外千萬です。どうして先生は、それに對して辯解なさらないのでですか？」

こゝまで言つて學生はハラ／＼と落涙した。

押川氏は、黙つておしまひまで書いて居たが、やがて、その學生の顔をまともに見て、

「そんな怖ろしい事が、君にできるかね」

「無論できません。僕はこれでもキリスト教徒です」

押川氏の巨眼は、電光の如く輝いた。

「君に出来ないやうな怖しい罪惡が、どうして私に出来ると思ふか！ 歸れ！」  
 學生はその場に慄伏した。  
 「先生！ 分りました。私が悪うございました」  
 「分つたら行け。たとひ千萬人が事實だといつて證明しても、嘘はどこまでも嘘だ。自ら墓穴を掘る者に惑はされるな」

また或る年、學生のカンニングが問題となつて、普通科一同は、押川院長の前に呼び出された。

院長は、學生の心の底まで見ぬくやうな眼で、ちつと一同の顔を見つめながら、

「學生が試験中にカンニングをする。それは、正しい事かな、それとも正しくない事かな？」

「正しくない事であります」

「その、正しくない事を、君達は敢へてしたのだ。神の前に恥かしいとは思はないか？」

「恥かしいと思ひます」

「よろしい。之からは、どこまでも正々堂々、自己の實力を以て試験を受ける事だ。力が足りなくて落第するのは止むを得ない。紳士にあるまじき眞似をして及第しようといふ陋劣なる心事にまさ

ること萬々だ」

グワン！ と一撃、學生は其の一言にふるへあがつた。院長は更に聲を勵まして、

「君達は、なぜその時に、潔く、正を踏んで討死しなかつたのだ。學問の目的は魂の向上だ。

精神の向上だ。もし吾輩が死んで、諸君が、その死骸の上に登り、それだけ地上より高まるならば、諸君の魂が、精神が淨化されるならば、吾輩はいつでも喜んで諸君の爲めに死ぬ。それが吾輩

の念願だ」  
 院長の聲は曇り、熱涙はボタ／＼と落ちた。教師も泣いた。學生も泣いた。座中一人として頭を上ぐる者なく、歎歎の聲堂に満ちた。それ以來、學生の氣風は一新した。

師弟の座談について、飛田忠順氏の著「野球生活の思ひ出」の一節を借用する。早大野球部員が、奈良に合宿して冬期練習をやつて居る所へ、牛肉をしこたまもつて神戸からやつて来たのは、先輩の松田捨吉氏だ。酒の好きな松田氏と、禁酒黨の大御所安部磯雄氏との間にはさまつて、選手監督の飛田忠順氏が、苦心慘愴の一場面である。

陽が東大寺のかけに沈んだころ、一同は練習を終つて、三々五々釜屋に引きあげる。そこにはチヤンと松田の御馳走である、血の出るやうな牛肉、スキ焼鍋が勢揃ひして待つてゐる。私共老人組は安部先生を中心として、松田と私が差し向ふ。スキ焼の調味は、先生頗ぶる御自慢であつて、他人の容喙を許さない。

先生はさかんにヘットをジー／＼いせながら、葱を投じ三つ葉を混ぜ肉を配すといふやうに、夢中になつて居られる。そこへ女中のおまささんが、一合徳利を持つて來た。

目ざとくそれを見つけた松田は、思はず、

「あッ！」といつて奇聲をあげた。先生は一向氣づかれないけれども、私はクスリと笑つた。

「すまんな、こないにして貰うては……」

彼は相好をくづして笑みこぼれてゐる。彼は正しく其の正體を知らないのである。

「先生、これ戴いてもよろしいですか？」

「いや、まだ早いですよ。よく煮ないと危険です」

先生は、松田の質問に對して、見當ちがひの答へをなさる。松田は一寸苦笑したが、たまたまになつたものか、問題の徳利を先生の目の前に突出し、

「先生、これですよ」

といひながら、へ／＼と笑つた。

先生は、チラと徳利を見られたが、

「いや／＼、今いれると水つぼくなつていけません、兎に角味を見てからです」

質問のポイントには一向觸れない。私は、をかしさを堪へて黙りこくつて居た。

先生の返答に聊かの不審を抱いた彼は、さすがにインサイド・ウォークを忘れなかつた。彼は直ちに徳利の口を鼻の先にもつて行つた。額に皺をよせて嗅ぎ廻した。彼の芳香を豫期した徳利の液體は、たしかに無臭であつた。

私はとう／＼吹き出しながら、長く罪をつくるのを慮れて、

「松田、それは水だよ。お前が要求する或る物ではないよ」

「なんだ水か？ どうもふしぎだと思つた。まさかね……」

かうはいふものの、彼の顔には一抹失望の色が讀まれる。運動に馴れてゐない身體で一日中グラウンドを駆けめぐり、今は綿のやうに疲れてゐる。特殊のコントロールを以て讚美せねばならぬ營である。

私は朋友の誼みに、何とか救つてやるわけにはいかぬものかと考へた。切つてもきれぬ戦友松田のために、肚の中で策戦を凝した。

「先生、松田はこの水徳利を見て、テツキリあれだと思つたのですよ」

「あゝ、さうですか。なるほどね」

實にアツサリした御挨拶、むろん此の一矢で、先生を射留めようとは考へない。第一球はふつても、第二、第三のストライクを狙つて、ヒットを飛ばさうとする。

「先生、毎晩少しでも飲んでゐるものは罰當りですから、刻限が來るとたまらないんですね。きつと」

「さうでせうね。やはり悪い習慣なんです」

「ちつともつぼにはまつて來さうもない。第二振に空を切つて、ます／＼バッターたる私はインザボールに陥る。残りは僅かに一球のみ。先生は毒味の一片を口の中に抛り込まれた。こゝで先生に釣球を用ゐられては、打者の選球は立ちどころに決せられる。背水方法、セーフティのバント。

「先生、どうでせう。奥さんから毎晩許されてゐるおしきせだけ。……随分今日は疲れたやうですから」

先生は、箸を控へて、しばらくの間私の顔を見つめてゐられる。私は少し不安を感じた。餘計な事を申出て、小ツびどくヤツつけられるのではないか。松田は三つ葉をつついで無言の行。

「あゝさうか。飛田君がさつきから何を言つてゐるのか、サツパリ解らなかつた。あゝさうか、松田君ならいゝでせう。君、一寸、注文してきて下さい」

私はホツとして、いそ／＼と座をたつた。私の注文したものは、おまささんによつて運ばれた。松田は破顔一笑すると、

「どうも先生すみません」

彼は獨酌でチビリ／＼やり始めたが、一合の酒はなめるやうなものであつた。私は心の中で、「しまつた！」と叫びながら、先生に再戦の火蓋を切つた。但し間接射撃である。

「一本ぢや駄目だらう。毎晩きまつてどの位やるんだい？」

松田は、

「うむ、さうだね」

と口をきつた時、先生はあたかも暴君のやうに壓しつけた。

「もういけません。度を過すといけない。足りない位がよろしい」

ゲーム、セツト！

## 九、婚姻と座談

結婚は人生の大事である。何しろ、九千萬人中の一人と一人が一緒になつて、借老同穴の契りを結ばうといふのだからさう、簡單には運べない。「婚姻と座談」の一項を設けた所以である。

縁談は、媒酌人が双方の間に入つて、全然知らぬ他人同志を結びつけるのもあれば、親類又は友人知己の間で、「あの子を貰ひたい」「あの人に呉れたい」といふやうな話から、わけなく纏る縁談もある。それ／＼違つた關係、動機等によつて、婚姻の座談も、内容形式に非常な相違を生ずる事勿論である。

その一例として、従兄が仲のよい従妹に自分の友人をすゝめる「思出の記」の一節を借用する。

僕はふと思ひついて、話を轉じた。

「鈴江さん、あなた、來年の四月卒業でしたね」

「はあ、さうよ」

「卒業後はどうするのです、洋行？」

「さうね——」

「そしていつか言ひなすつたやうに、生涯獨身で女子大學を興すのですな？」

鈴江君はだまつてゐる。

「併し鈴江さん、獨身の女はどうしても不具ですよ、聖書の文句ぢやないが、男女ひとり居るは宜からずです。それは、大きな事業は獨身ときまつたやうなものだが、そんな人は萬人の中一人あれば大したものですよ。それより良妻賢母の必要は一般に涉つての事ですよ。どうしても大國民の建物は、好家庭の煉瓦を積まなければならぬ。家を粗略にするのは女の恥辱です。僕は子供に破れ衣を着せたり、良人に焦げ飯を食はしたりする社會的事業（婦人ですよ）には賛成できない」

「それなら私は、どうしたらいいのでせう？」

と、鈴江君は顔をあげた。

「無論適當の紳士を助けて、内、家政を整理し、子女を育養し、そしてあまりあらば一臂を外に振

ふのです」

「でも、家政なんか面倒くさいわ」

「そんな亂暴な事があるものですか。それが女の職分です。それともたつて厭なら、良人と二人で下宿住ひをするのです」

「でも、下宿はひどいわ」

「それぢやいやでも家を持つのです。何、少し持つてごらんなさい。面倒と思つた事に趣味が出来て、どんなに楽しいか知れない」

「おちいさんのやうな事をいつてらつしやる」

と鈴江君は笑つた。

「いゝですか」

と、僕は一步を進めた。

「假りに、假りにですよ、松村なら松村——」

鈴江君の頬に、薄り紅がさした。

「松村でも誰でもいいが、教育ありですね、品行方正で、前途有望の紳士が、いゝですか、鈴江君

と一緒に家庭をつくりたいといつたら、どうですか。それでも私は家政なんか面倒くさいからお断りします。どこか他をきいてごらんなさいといひますか」

鈴江君は更に一段顔を赧くして、そして笑つた。

「そんな紳士を萬々一拒絶するなんてそんな事があつたら女冥利が盡きます。そんな時には否應なしに——」

「そんな壓制な媒はないわ」

と鈴江君は笑つた。

「そりや少しは壓制かも知れんが、併し若い内はよくまだく先きに好い縁がいくらか金の車を挽いて待つてゐるやうに思つて、折角の好い縁を見のがすものです。まだくで延しくして、年をとつた揚句が、それ、發句にありますね。

秋口の水瓜ごろりと投げて賣り

すて賣りとは情ないぢやないですか。それを思ふと僕は女は何十何歳までには是非結婚すべしといふ法律を設けたくなるのです。出来る事なら、そんな人達に會つて、言つてきかしてやりたい位——」

「おばあさんのやうなことを言つてらつしやるわ」

と鈴江君は莞爾した。

「冗談ぢやない、本當の事です」

「でもそれぢや女に選擇權がないやうになるわ」

「若い男女の選擇があてになるのですか、(尤も僕の選擇だけはあてになると、獨りで心に斷つた)今の若いものに、夫妻の選擇さすのは、色盲に友禪の買物頼むより猶ひどい」

「でも、自分の良人を、自身に選まれないといふのはひどいわ」

「だからさ、教育の必要はそこでせう。僕の教育といふのは學校ばかりぢやない、社会的教育をいふのです。珍らしいから眼迷ふのです。ね、男珍らしかつたり、女珍らしかつたりするから、直ぐ迷ふのです。だからなるだけ男女を隔離しないやうにして、いゝですか、せめて中學校位までなと合同教育を行つて、それから先づ一家親類知己朋友の間がらなど、男女の交際を頻繁にし(さうすれば家政の整理に暇がないと切りこまれた時は、そこで衣食住改良の必要があると答ふる筈だつたが、鈴江君は幸ひに僕の撞着を認めなかつた)たいものです。さうでせう?」

「それは私も同意よ。だからあなたも精出してお敏さんと交際なさい」

と鈴江君が笑つた。

僕はぐつとつまつた。

お敏さんといふのは、「僕」即ち菊池愼太郎の愛人で、鈴江君にすゝめようといふ松村清磨の妹である、彼は他の場面に於て、單刀直入的に、その松村を説いて居るのである。

「君は、無論別家を興すのだね」

と僕は問うた。

「さう、僕はそんな事はまだよく考へてゐない方だが——君も知つとる通り、僕はその、家名、門地なんかいふ事にはあまり頓着しない方だね、自分のやりたい事業さへやると、餘事はまあどうでもいゝといつたやうなわけで、僕の義兄といふ男が非常に律義な男で、両親の方は氣づかひなしだから、十分勉強して見るつもりでゐる」

「野田家を嗣いで呉れる氣はないか」

僕は突如として問うた。

「何?」

松村は愕然として、まだ十分僕の間を解せぬ容子。

「野田姓を名乗つてくれないか？」

「何を冗談いふのだ」

「いや、冗談ぢやない、君、本當に鈴江君を娶つて、野田叔父の名跡をたてゝくれないか？」

松村はちつと僕の顔を見て、やゝ暫し考へてゐたが、

「どうして、突然、そんな事をいひ出したのだ？」

「いひ出すのは突然だが、熟議の結果さ。決して冗談ぢやない」

松村は、またしばらく考へてゐた。

「でも、僕には到底野田家の名跡はつがれない、不相應だ」

「何、不相應は此方からいふ事だ、打明けた所が、君も知つとるが、野田家も不幸にあつてね、今は母子の體二つ、財産があるでなし、眞の名ばかりだ。實に君には氣の毒さ。併しそこを折入つての頼みだ。見込まれたと思つて、考へて呉れたまへ」

松村は三度び考へた。

「でも、吾輩はまだ、之から勉強といふ身體だから」

「何、今直ぐ家持になつてくれといふんぢやないがね。唯そのつもりでゐて呉れゝば宜いのだ。それとも鈴江君が、君の氣に入らなけれや詮方がないがね」

松村は根くなつた。

「餘り突然で、吾輩には考ふる事もできん」

「さうさ、餘り突然言ひ出して、餘り性急に返事を促すやうだが、四五日中に君も歸省するだらう。その前に、是非君の意向をきいて置きたいのだ。僕だつて、君とかう親しくするからには、僕の姉といつたやうな鈴江君と君の結婚を望むのは、無理ぢやあるまいぢやないか」

「何しろ餘り突然で、吾輩には何といつていゝか知らんが、まあ一兩日考へさしてくれたまへ。

妹にも相談して見よう。——無論、何も、國の兩親の指圖次第だが——」

此の座談がみごとに成功し、縁談が圓く纏つて、間もなく鈴江君は野田清磨夫人となつた事は特記するまでもあるまい。



## 十、夫婦間の座談

座談の領分を夫婦間まで擴げてはきりが無いが、夫婦間の座談だつて、座談の一種に相違ない。夫婦の結合は「愛」に終始しなければならぬ事は勿論であるが、夫婦の間には「愛」の外に「敬」がなければならぬ。妻を愛する夫はある、夫を愛する妻もあるが、互にその人格を尊重し、心より敬愛して居る夫婦といふものは、割合に尠いものである。

新婚直後と三四ヶ月後とを比べて見るがよい。初産の前後と、二人目、三人目のお産前後とを比べて見るがよい。愛のみで成立つた夫婦、愛あつて敬なき夫婦の行路は、決して新婚當時のやうに平和ではない。圓滿ではない。

罪のない夫婦の座談の見本として、佐々木邦氏の「夫婦百面相」の一節をぬきく借用する。岡本といふ會社員と細君とが、ダンスホールの事から口いさかひをはじめたのである。

「それぢや私もお供致しませうか？ そのダンスのお師匠さんの處へ」

「よせよ、お前なんかだめだよ、料理屋へサンドウキツチを持つてゆくやうなものだよ」

これが岡本君の警句だつた。二人は氣まづい思ひして、めい／＼の部屋に引きとつたが、暫くして細君が外出の支度をはじめた。岡本君は急に心配になつて來た。そこで自分から折れて出た。

「まア／＼掛けなさい。今夜はおれが少し言ひ過ぎたかも知れない。……何か文句があるなら言つて御覽。遠慮はいらない」

「ごさいますとも。私、あなたの態度がすつかり變つてしまつたと思ふと、悲しくなりますわ」

「おれは別に變つたとも思つてゐないがね」

「變りましたとも。……結婚後少し變りましたわ。民子が生れてから大分變りましたわ。三人になつてから、すつかり變つてしまひましたわ。三段に變つてますわ」

「然うかね」

「私、お目にかゝつたばかりの頃は、あなたが、こんな邪慳な物の言ひ方をなさる人とは思ひませんでしたわ」

「それは結婚前だもの。嫌はれると困るから、遠慮があつたのさ。正直な話だ」

「あなたは何と仰有つたか、覚えていらつしやいますか？」  
「いつの事だい？」

「あの時の事よ。私に申込んだ時よ」

「そんな古い事は、どうでも宜い」と、岡本君は顔をしかめた。ロマンスつきで無闇に御機嫌をとつてゐるから、昔の話を持ち出されると、頭が上らない。

「宜かございませんよ。私、順序として申し上げます」

「おれはもう、すっかり忘れてしまつた」

「それなら尙ほ申し上げますわ。最初あなたは『菊代さん、お憤りになつちや困りますよ』と仰有いましたね」

「さア」

「私が、『なアに？』と訊きますと、あなたは『菊代さん、あなたは……菊代さん、あなたは』つて吃りましたのよ」

「ふうん」

「それから、『私の孫の』つて仰有いました」

「言つた」

「こゝで一番初めから、又やり直してございましたわ。『菊代さん、あなたは、私の孫のお祖母さんになつてくださいますか？』つて」

「能く覚えてゐやがるね」

「私、意味を考へて見てから、ハツとしましたわ。あなたの孫のお祖母さんなら、あなたの奥さんですもの」

「婉曲に言つたんだ」

「私が黙つてしまつたら、あなたは慌てましたわね。『菊代さん、冗談ですよ、菊代さん、御免下さ』つて」

「……………」

「春でしたけれど、丁度こんな寒い晩でしたわね」

「……………」

「ねえ、あなた」

「さうだつたらう」

「私、口で言はないで火鉢の灰に字を書いてみましたの。あなたは慌て、しまつて、それが分らないんですもの。ふるへてゐなさいましたわ」

「もういゝ加減にしておくれ」

「その中に、あなたの手と私の手が火鉢の上で觸つたでせう。あなたは私の手を握つて、押し戴いたちやありませんか」

「もう堪忍しておくれ」

「いゝえ、私、申上げるだけのことは申上げますよ。……その晩私がお玄關まで送つてあげた時、

あなたは、御門の潜りの處で振りかへつて、手を合せて私を拜みなすつたちやありませんか？」

「あれはその時の心持を現はしたのだ。何もお前を神さまと思つたんぢやない」

「もう一遍、その時のお心持に戻つて下さいませ。私はその時とちつとも變つてゐませんよ」

「おれも精神に於ては變つてゐない」

「それぢや、何に於て變つてゐますの？」

「さあ」

「それ御覽なさい」

「年を取つたんだ。子供がある。もうそんな甘つたるい事を言つちやゐられない」

「子供がありますから、特別に同情して戴きたいんでございます。どこへも出られないぢやありませんか」

「それも分つてゐるよ。もう一級あがつたら女中を置いてやる。まあ、辛抱しておくれ」

「私、あなたが優しくして下されば、働くのなんか何でもございませぬのよ」

「分つてゐる。それでも肚の中ぢや感謝してゐるんだ」

「どうでございませうか？」

「本當だよ。つい我儘が出るんだ」

「さう仰有つて戴くと、私も氣が晴れますわ」

「機嫌を直して、お茶でも入れておいで」

「あつちへ、いらつしやいよ」

「よし」と岡本君はすつかり折れた。

此の一節などは、夫婦喧嘩のあとさらひ、さしむかひの座談のサンプルとして上乘のものだ。

夫君も細君も、くれぐれも忘れてならないのは敬愛の二字だ。愛あつて敬なき夫婦は片輪だ。夫婦間の座談とても同じ事、いくら夫婦間には遠慮がないからといつて、落語に出て来る八公や熊公夫婦のまねは慎まねばならぬ。

## 十一、吉凶と座談

人生の行路は、決して坦々たる大道ばかりではない、變化もあれば波瀾もある。榮枯盛衰は浮世の常、吉凶禍福はあざなへる繩の如しと昔の人も申して居る。しかし人間は誰しも不幸を望む者はない。悲しい出来事は、なるべく避けたいが人情、どうしてもそれが避け得られないなら、せめて幾分でも其の悲しみを小さくしたいと念願するのがあたりまへであり、此の心持を人に及ぼして、人の悲しみを慰め、不幸に泣く人に希望を與へようとするのが、人の心の美しさである。

## 慶 祝

それと同時に、他人に喜び事があつた場合、其の人とともに喜び、其の喜びを二乗、三乗すること、やはり美しい人情である。親鸞上人は「一人居て喜ばば二人と思ふべし、二人居て喜ばば三人と思ふべし、其の一人は親鸞なり」と申された。此の眞情がなかつたら、口先ばかりの祝辭、うはべばかりの弔辭が何にならう。悲しむ者と共に悲しみ、喜ぶ者と共に喜べ。天國はその人のものであると基督も教へて居る。

友人知己の間に、結婚、出生、當選、入學、卒業等のおめでたがあつた場合には、なるべく早く行つて、心から祝つて上げるがよい。それによつて、先方の喜びは倍加されるからだ。十日も二十日も過ぎてから、立派なお祝の品を持参されるよりも、すぐに飛んで来て、一緒に喜んでくれる方が、當人にとつてどんなに嬉しいか知れない。心、内であれば、色顔に表はるゝのたとへ、折角お祝に行つても、

「どうもお目出度うございます」

と口だけいつて、その實一向お目出度くないやうな顔色では困る。如何にも目出度い、自分も嬉しいといふ表情が、お祝ひの言葉に伴つてこそ、先方の胸にも通ずるが、その人の心の底に、人の幸福を羨みねたむ心が少しでもひそんでゐたら、ほんとに其の人と共に喜ぶといふ表情は出ないものだ。相手により、出来事の如何によつて、お祝ひの言葉や作法は違つて来るが、相手の幸福を祝福する心は、常に一つである事を記憶して貰ひたい。

## 弔問

人の爲めに喜び、人と共に喜ぶ場合には、おめでたう／＼でもすむが、人の不幸に際し、その人と共に悲しむといふ場合は、單に一緒に泣いて上げるといふだけでは物足りない。出来るだけ其の人に慰安を與へ、悲歎の中から希望の光を見出させるやうにしむけなければならぬ。古人も「愁人に向つて愁を説くこと勿れ」といつてゐるが、親兄弟や配偶愛兒を失つたといふやうな、人生の最大不幸にぶつかつた人に向つて、悲しき事の數々を述べ立てるのは、却つて思ひやりのない行爲である。さうした場合の挨拶や座談は、十二分の注意と考慮を拂はねばならぬ。一應弔意を述べた後

では、なるべく先方の氣を引き立てるやう、憂愁鬱悶を忘れるやう、真心こめて慰問を與へる心がけが必要である。

「御主人様がおなくなりになりましたさうで、何とまあおくやみ申上げてよろしいやら、私にはどうしても、まこととは思へませぬ」

ぐらゐまではいゝとして、

「御主人様はほんとにおやさしい方でございました。私風情が途中でお出會ひ致しましても、いつも御主人様の方から何かと御親切な御言葉をかけて下さいました。どなたからも好かれて、御主人様のことは、誰一人おほめ申さない者はございません。まだお年もお若く、これからといふところでございますのに、お痛はしいことでございます。いつかこんな事もございましたよ……」

といふやうな調子で、それからそれと故人の思ひ出を語ることは、同情に富んでゐるやうで、實は却つて、先方に悲しみを増さしめる結果となる。

尤も一年二年後の年忌、法事とか、追悼會とかいふ場合には、どんなに故人の徳を稱へ、故人を追慕しても差支ないが、新しい悲しみにとざされて居るお通夜や告別式の席上などでは、あまり故人のことを長々と述べ立てない方がよろしい。それよりも、幾分なりとも悲しみを忘れるやう、

心がまぎれるやうに仕むけるのが、ほんとの親切といふものだ。  
 「どうも飛んだ御不幸で、何とお悔み申上げやうもございません。皆様のお力落し、如何ばかりかとお察し申上げます。しかし此の上はお後の事が大切でございます。御落膽の餘り、もしあなたが御病氣にでもなられるやうなことがありましたら、それこそ大變でございます。どうぞあまりよくよお考へなさらずに、おからだを大切にして下さい。及ばずながら私も、何かと御相談の御相手になりませうから」

かういはれると其の人も、悲しみの中にも、自分の立場や責任を考へて、なるほどさうだ、子供達の爲にも、メソ／＼泣いて居る場合ではないと、氣がつくに違ひない。

凶事の場合には、殊更、言葉の多いことが禁物だ。甚だしいのはお葬式に行つて、酒を飲み、唄をうたはなすまでも、喪主や家族が目や涙を泣きはらしてゐる傍で、大聲で笑ひさわめくやうな悪い風習が、今でもところ／＼に残つてゐる。これは悲しみを笑ひ飛ばさうとするのかも知れないが、あまりに心なきしわざである。遺族の身になつたら、

「私達の心も知らないで……何といふ思ひやりのない人であらう」

と思ふに違ひない。一言一句にも哀悼の誠意がこもつて居る弔問、それが凶事に臨んでの挨拶、

座談の要訣である。

### 病氣見舞

病氣見舞に出かけた場合にも、出来るだけ、病人や家族の氣を引き立てるやうな話の種を選ぶがよい。病氣の性質により、面會の出来ない場合は格別、醫師が差支ないというたら、親しく見舞つて淋しい心を慰めてやりたいものだ。病は氣からといふが、全く其の通りだ。一寸した一言で、病人が非常に元氣づいたといふやうな例は珍らしくない。

長いこと、結核で入院してゐる病人があつた。左程重くもないのだが、本人はスツカリ悲觀して今にも死にさうな顔をしてウン／＼呻つて居る。そこへ、かつて同じ病に犯されて、一時は醫者から絶望を宣告されたが、自分の意志の力一つで全快した経験のある友人が見舞に來た。

「やあ、今日は大變顔色がいゝね。氣分はどうだい。其の調子なら少しも心配ないよ、僕だつて君と同じ病氣だつたんだぜ。いや／＼、君よりもつと／＼進んでゐたんだぜ。それがどうだい、今ではスツカリ癒つてしまつて、此の通りピン／＼してゐるぢやないか。この位の病氣が何だ、しつか

りしろく」

その友人は自分の経験を詳しく話して、結核だからつて何もそんなに悲観する必要はないと、循環と説き聞かせた。病人は少からず力を得たらしかつた。

しかし病人といふものは、何でもないことに氣をもむものだ。常人なら一笑に附するやうなばかげた些事でも、病人には大きな煩悶の種となることがあるものだ。どこの病院でも、四病舎とか、四號室といふやうな名を避けてゐるのは、感傷的な病人の心に、もしも變な連想を起させてはこの注意ときく。一體、縁起をかつぐなんていふ事は、まことにばか／＼しい事だが、世間には随分極端なのがある。

「僕は今度はどうしても助からないやうに思ふんだがねえ」

「ばかな！ どうしてそんな事をいふんだい？」

「どうしてつて、君失職してうつかり引越した先が四二番地（死番地）ぢやないか。引越すと間もなく此の病氣だらう。所詮助かりつこはないと諦めて居るよ」

「ハツ／＼さう考へるからいけないのだ。シニ番地ではない、ヨニ番地と考へて見たまへ。病氣が癒つて、再び世に（ヨニ）出るといふ辻占ぢやないか。何で悲観する事があるものか」

「成程ね。さういへばさうだね。よしッ、それが事實になるやうに、僕も一生けんめい精出して、病氣を癒して一日も早く退院しよう」

かうなればしめたものだ。

長い事病床に呻吟して居た大名が、お庭の松が枯れたときいて、「予の生命も、遠からず絶えるであらう」といつて、ふさぎこんだ。ある人がそれをきいて、早速狂歌を一首奉つた。

お手植ゑのお庭の松は枯れにけり

千代のよはひを君に譲りて

大名は急にニコ／＼と笑ひ出した。忽ちにして元氣回復、日ならずしてとの身體になつたといふ話がある。歌の功德もさる事ながら、縁起をかつぐ人、ことに病人にはこんなチョツトした事さへ氣にかゝるものだといふ一證左にならう。だから病人を見舞ふ場合には、注意の上にも注意して口をきかねばならぬ。誰しも健康がすぐれないと、心持もムシヤクシヤするものだ。そんな時にはなるべく病氣の話に觸れないやう、一時たりとも心を他に轉ぜしめて、病苦を忘れさせるがよい。それかといつて、病人が充奮するやうな話材は、無論よろしくない。

野球部のスタープレイヤーが、病気で入院してゐると假定する。そこへファンが見舞に行つて、今度の〇〇との試合は到底味方には勝味がないとか、君がゐてくれたら勝利疑なしなんだが、投手がサブぢや心細いとか、そんな話をしたら、病人は直ぐ亢奮して、一二度位熱を上げる事疑なした。その爲めに、一週間で癒る病気が、二週間にも延びたといふやうな例はいくつもある。親切が却つて仇となつて、本人を苦しめる結果となつたら大變だ。くれぐれも病人相手の際は言葉を慎むやう注意することだ。

## 附 録

### 笑 ひ の 種

座談と「笑ひ」の大切な關係については、本文に既に詳述してあるから省略するが、「笑ひ」は、心の緊張が突然ゆるむ時に起るもので、それがゆる／＼とゆるむ時に、人は物悲しさを感じる。その心理を辨へて置くと、座談の時に、大いに役にたつものである。

下位春吉氏の「お嘲の仕方」の中に、かう書いてある。

「笑ひの通則のやうに、學者に見なされてゐるのは、極めて縁の遠い二つの物の結び合せである。極めて眞面目なものと、おどけたもの、大きなものと小さいものといふやうな配合によつて、笑ひが起ると稱せられてゐる。これは心理學者の教へるクスグリの原則である。

楊貴妃はあの顔をして豚を食ひ



といふ川柳の可笑味は、風にもたへぬ楚々たる美人楊貴妃も、支那人だからやつぱり豚を食つたに違ひないといふ、楊貴妃と豚との結合である。

絶世の美人小野小町のなれの果てを嘲けるために、

虱など卒塔婆の上でつぶしてゐ

といふのも、小野小町と虱のとり合せだ。例は益と下品だが、

汝等は何を笑ふと隠居の屁

といふのも、「汝等は」と極めておごそかに、大きな眼鏡ごしに、ギョロリと一同をねめまはした御隠居の眞面目さと、その御隠居の屁のをかしさとの配合である。

此の規則は、クスグリの原則である。しかし上品なクスグリのみの原則ではない。それが上品なクスグリとなるか、下品なクスグリとなるかは、心理學者の關知する處ではない。それは演壇に立つ人の討究すべき問題である。極端なる二つの思想のとり合せは、必ずしも上品なクスグリばかりではないから、之を應用する人は、特に考慮を要する。

これに反して、安心して用ゐられ、且つ極めて容易にして、比較的上品なクスグリは、誇張法である。思ひきり大きな誇張を用ゐると、必ず笑はせるものである。

その他、擬人法や對照法、偶擧法等も、これを巧みに用ゐると、上品なクスグリになる。同一語句を、間を置いてくりかへす場合にも、反覆法は極めてよいクスグリになる、だが、初めに、誰でも自由に活用できるのは誇張法だ。

そこで、クスグリを入れるについての、極めて大切な注意を附記しておく。それは、「人を笑はせんとする時には、自身は決して笑ふべからず」といふ事だ。クスグリを入れるには、少しも笑顔を作らずに、極めてまじめに入れねばならぬ。處が、やゝもすると、クスグリを入れる前に、嘸をする人の方が、まづをかしくなつて、ニコニコ笑ひはまだしも、中にはアツハくと大笑ひをして、大切なクスグリは少しも出さず、自分ひとりで大笑ひに笑ひこける人がある。聴衆は少しもをかしくない。子供に、をかしい嘸をさせると、大抵これである。

演壇の人が笑へば笑ふだけ、聴衆の笑ひを滅殺する。演者がまじめであればあるだけ、それだけクスグリは有効である。演者と聴衆との間には、一定量の笑ひのポテンシャルティがある。それを演者則で浪費すれば、聴衆の方の笑ひの量はそれだけ減少するものと思つてゐて、大した誤りはなからう。

以上は、演壇に於ける「笑ひ」に關する注意だが、そのまゝ座談にもあてはめられる、適切な注

意である。

序に、誇張法と、隅擧法について、下位氏の説を摘記する。

「子供の用ゐる辭様で、一番普通なものは誇張法であらう。

子供が、顔色かへて飛んで歸つて来る。

「あのネ、あのネ……」

と息をはずませて、目をパチクリさせてゐる。たゞ事ならずと母親が、

「どうかしたの？ 何があつたの？」

とたづねると、

「あのネ、おもてに大きな犬がゐたの」

などといふ。人を笑はせるには極めてよい辭様である。

講談師早川貞水は、好んでこれを用ゐた。

「向つて来る男を、エイツといひさま投げとばした」

といふのを、

「首筋つかんで、エイツと投げると、もんどり打つて四五間先きへ落ちた」

といふと誇張法である。浪花節や講談はまづこれ位である。投げ上げられた男と、落ちて来る男とが、空ですれ違ひさまに挨拶し合ふ位がとまりである。所が、貞水のは更に一層大げさだ。「首筋つかんでエイツと投げると、ヒューと空を切つて飛んで行つたが、今に行方がわからない」

などといふ。これはちと大げさ過ぎる。

長いといふと思ひきり長く、小さいといふと極めて小さく、強ければ飛びきり強く、何事も噺には誇張が大切である。

隅擧法といふのは、全體の事をいふ代りに、その一部分、その一隅をあげて全體を代表させようといふのだ。「一本筋が三人通る」といふのは、筋ばかりあるいて居るのではない、一本筋をつけた兵士が歩いてゐるのだ。何でもない事のやうだが、この呼吸は噺には大切である。

「噺をしようと思ひますが、何かよい参考書はないでせうか」ときかれるたんびに、私は、その一つとして、必ず川柳の本をすゝめる。川柳は極めて短い内に、極めて多くの思想をいひ表はさうとする。その取材や奇警、觀察や奇想天外である。狂歌が、語呂のクスグリのみを生命としてゐる如き幼稚なものではない。川柳の語法、辭様には、噺をする人に非常に参考になる

事が多い。そのうがちには隠喩もある、擬人法もある、隅擧法などは澤山用ゐられる手段である。少し下品だが、

靴音に立小便が動き出し

などの可笑味は、全然隅擧法だ。之を、

立小便してゐる人が動き出し

といふやうに言つては、些かの可笑味もなくなつてしまふ。

明日でも剝つてくんなど飛車がなり

仙人様アと、濡れ手で抱き起し

おのれはまア、そなたはまアに、主はまア

などの面白味は隅擧法の呼吸だ。川柳をよむと、嘶の辭様に極めてよいヒントを到る處に見出す事が出来る』

その意味で、座談のたすけになりさうな川柳と、その對照として、狂歌數十首を抄録する。

元日 年禮 餅 萬歳 同 遺羽子 彼岸 長閑 雛市 初雛 同

据風呂に下女のゐるうち春となり

むべ山の中へ嵐の年始客

糸をまくやうに花嫁餅を食ひ

三河から来てつがもない嘘をつき

萬歳に下女ありつたけ笑ふなり

そのいやさ下女羽子板で叩くまね

彼岸中嫁の笑ひの本音なり

うららかさ頻りに錢がほしくなり

雛買ひし女は今朝の嫁茶賣り

どういふ氣だかと赤子に雛を見せ

猫が来て鶴程騒ぐ桃の御所

川 柳







同 産む時はもうこれきりと思へども  
子供醫者脈を追ひかけ追ひまはし  
醫者殿は辭世をほめてたゞれけり  
同 氣の毒さ醫者へ使ひが二人來る  
同 金包醫者は上から脈を引き  
同 賣家と唐様でかく三代目  
同 二代目は人のものと左官いひ  
軍 降參がすむと一度にひだるがり  
意 母親の意見拜むがしまひ也  
同 金がなくなつて女郎に意見され  
同 傾城と云ふ字が直ぐに意見なり  
下 女房の目のいそがしい下女をおき  
同 指二本額へあてゝ下女は逃げ  
藝 者がしも罷かへると藝者しやれ

喧嘩 舌戦が嵩じて三下り書いてゐる  
同 禪がとけて喧嘩の腰が折れ  
植木屋 木造りはいぢめ育てゝ褒めて賣り  
質屋 殺されに來たのに質屋繩をかけ  
同 置質の言葉多きは品足らず  
丁稚 道草に小僧口上おつことし  
座頭 人並に座頭の見るとは夢ばかり  
園基 碁敵は憎さも憎しなつかし  
同 死水のそばで母親碁の意見  
同 碁會所と醫者へと迎ひ二人出し  
同 小便に起きて女房は碁を叱り  
將棋 下手將棋袖を引かれてねめ廻し  
同 まけ將棋逃げるたんびにお手は何？  
同 刻限をきゝつゝ角の道をつき





掛取 掛取の笑顔は右之通りなり  
 吝高 貸さぬやつ意見がましい事をいひ  
 同 貸さぬやつ種々もの入りをいひ立つる  
 女中 朋輩を寝しづまらせてくけてやり  
 臍 臍の垢ふととりそめてかいで見る  
 雪隠 野雪隠かりて茶畑ほめてゐる  
 枕 半分は枕に分ける五十年  
 若殿 若殿は馬の骨から御たん生

狂 歌

秋の田のかりほの庵の歌がるた取りそこなつて雪はふりつつ  
 あし引の山鳥の尾のしだり顔人丸ばかり歌よみでなし  
 白妙の富士の御詠で赤ひとはなの高ねに雪は降りつつ

蜀山人

鳴く鹿の聲聞く度に涙ぐみ猿丸太夫いかい愁嘆  
 その儘に置くしもの句をかり橋の白きをみれば夜ぞ更けにける  
 春がすみ立ちくたびれて武藏野の原一ぱいにのばす日のあし  
 一刻を千金づつにしめあげて六萬兩の春のあけぼの  
 鎌倉の海より出でし初鰹みなむさし野のはらにこそ入れ  
 いかほどに耐へてみても郭公なかねばならぬ村雨のそら  
 質藏にかけし地赤の蟲ぼしは流れもあへぬ紅葉なりけり  
 風鈴のりんと響きし秋かぜは萩の上葉の一文のぜに  
 もみぢちる萩や薄の本舞臺まづ今日は之きりのうた  
 ひとむれの奥女中かと思へるまでに木毎に花の綿帽子雪  
 神々の留守をあづかる月なれば馬鹿正直に時雨ふる也  
 曇み込む胸の思ひをいひかねてひねりし塵や山となるらむ  
 世の中にたえて女のなかりせば男の心のどけからまし  
 てる月のかどみをぬいて樽まくら雪もこんく花もさけく

全盛の君あればこそ此の里は月もよし原花も吉原  
 雀殿お宿はどこか知らねどもちよつちよとござれささ(酒)の相手に  
 世の中はいつも月夜に米の飯さて又申しかねの欲しさよ  
 改年の御慶目出度天の戸をあけてよい春は來にけり  
 早蕨がにぎり拳を振りあげて山の横つら春かぜぞ吹く  
 忍ぶれど色にいづるを見のがして物や思ふと問はぬめでたさ  
 百姓の家の寶に鋤と鎌くはめでたいの三道具かな  
 いかにせん心の駒の進みつつ目出度い事におはれぬる身を  
 生酔の禮者を見れば大道を横すぢかひに春は來にけり  
 ぬぎて今日かへす人も耻かしや花みる程の借衣のそで  
 火でそろかいや火にあらず高野山谷三つこえて螢とぶ也  
 名にめで折らぬばかりぞ鬼あさみ我おちにきと人に語るな  
 貧乏の神もなごむや借錢は今日みな月のみそか拂ひに  
 落武者のおづるも道理薄の穂いり日を招く鉾に似たれば

入 安  
 成 安  
 淨 治  
 末 保  
 貞 德

朝酒を多く飲みなば暮るゝまでただ之れ權花一日の醉  
 墓原に人まつ蟲の聲すなりわれかち行きてとふこともいや  
 ながむれば顔のゑくぼぞ皺となる月の鼠が鹽を引くかよ  
 引つかつかたびら越しに月見れば雲井をはしる瘦せ風かな  
 あひうゑて梢になりしかきくけこ御音信こそ通じたりけり  
 昨日今日あら寒やとて重ねきる小袖ぞ冬の初めなりける  
 目に青葉耳に鐵砲ほとゝぎすかつをは未だ口に入らず  
 一合から九合かぎりの富士を見てなど三國の山と云ふらん  
 動かじと萬の神の集りて踏みかためたる葦原の國  
 ある人に讀み遣しける

歌よみは下手こそよけれ天地の動き出してはたまるものかは  
 澤庵和尚に蕎麥粉贈るとて  
 子供すらもたぬ法師の身にしあればそば粉を入れて申入候  
 おなじく返し

玄 康  
 法橋 由己  
 藤原 成卿  
 讀人 不知  
 澤庵和尚  
 淡路守宗増  
 四方赤良  
 近 道  
 何 國  
 飯 盛  
 江 月

そばことて賜はるからは我こなりままこにすなと申付候

龜井戸龍眼寺に萩を觀て

寄せ切れとみゆるお寺の錦などもかしこもはぎだらけにて  
角あれば物のかゝりてむつかしや心や心まろくとせよ

有空不二の心を

ありの實をなしと云ふ名はかはれども食ふに二つの味ひはなし

はるの初めに

吳竹の世の人並に松立て、破れ障子に春は來にけり

辭世

この年にはじめてお目にかゝるとは彌陀に向ひて申しわけなし

世の中に酒といふものなかりせば何に左の手をつかふべき

わが酒はくだを眞葛の原ならでとかく座敷に立さわぐ也

げに酒は愁を拂ふはきとてたは言も吐く青へども吐く

盃の朱に交はればおのづから赤うなりたる生酔の顔

澤 庵

菅 江

平 時 頼

讀人不知

四方赤良

慶 紀 逸

布留 仲藏

飯 盛

清 澄

醉龜亭天の廣丸

同

塵外樓清澄

唐衣 橋洲

橋架翁柳雪

同

五岳上人

話材としての逸話

紅葉の焚火に尻をあたくめて酒の徳利と寝たる秋の夜  
神佛の力たのみてわが禁酒かためにも飲み破れにも飲み  
さいと云ふ名のあればこそ夜遊びを四の五のといふ宿の女房  
盃に向へばかはるからくりや糸を引いたりあとを引いたり  
酒のみもいつしか酒に飲まるれば酒こそ娑婆の魔物なりけり  
衛生の眼さす敵は酒にしてめぐり逢うては又かへり打ち  
わがきらひてんぼと梨に替女燒麩打唐組に比丘尼塵辛

座談の練達者は、話材のストックが豊富だといった。その話材はどこから拾ふか。それは人の話をきく事だといった。毎日の新聞、雑誌の記事を、氣をつけて讀む事だといった。その例證にもと、逸話めいた話材を抄録する。古書、新書、さがせばいくらでもあらう。要點だノけートに書きとつて置くと、まさかの時の役にたつ。

## 獵官者撃退法

どこの國でも、内閣が變るたんびに、その首腦者が最も惱まされるのは獵官者の運動である。アメリカ十六代目の大統領リンカーンも、また此の惱みに直面した一人である。殊にリンカーンは正義の人である。情實によりて人のために官を設けるやうな人でないだけ、その激退には選舉戦以上の苦しみをなめたのである。

その猛烈なる獵官運動者の一人に、チエースといふ材木屋があつた。彼は長くニュー・ハンプシエーアに住んで、リンカーンのために極力働いたといふのを理由として、何か相當の官職につけて貰ひたいと申出た。リンカーンは、素より取りあげるべき筋ではないから、何遍面會に來ても、いつもいゝかげんにして追ひ拂つたが、此の男頗ぶるの執拗者で、何といはれてもあきらめない。斷られてもいゝやつて來る。やつて來ては、

「まだでせうか。任命はいつでせうか」

と、うるさくつきまとふ。これには正直者のリンカーンも、ホト／＼閉口した。

今日もリンカーンは、朝から多數の獵官者につめかけられて、ウンザリして居たが、ふとその中にチエースの姿を見つけると、何と思つたか秘書官に命じて事務室に呼び入れた。

チエースは、しめたとばかり、意氣揚々として、大統領の事務室に乗りこんだ。

「大統領閣下、お早うございます」

「やア、お早う。時に、あなたはたしかニュー・ハンプシエーアの方でしたね」

「然うです。もう度々お目にかゝつてゐます」

「さうでしたか。私はたつた一度、貴方の御郷里に往つた事がありますよ。丁度秋の事で、風の強い、寒い日でした。その日の演説の腹案を考へながら、郊外をあるいて居ますとね、路傍の枯れた薊の花に、一匹の熊蜂がとまつて、しきりに花から蜜を吸はうとして居るぢやありませんか。

熊蜂のやつ、何をとまどひしてゐるのかしら、あんな枯れた薊から、どうして蜜がとれるものか。ばかな蜂だなアと思ひながら、私は暫く足をとめて見て居りました。

風はさかんに吹いて居りました。枯れた薊の花は、その都度地面にたゞきつけられるやうに揺れて居ました。それにも拘らず愚かなる熊蜂は、一生けんめい其の花にとりついて居るんです。私はそれを見て、ニュー・ハンプシエーアの熊蜂は、何といふ根氣よしだらうと感心しましたが、

あとで町の人に會つて見ると、誰も彼も、熊蜂以上に根氣のいゝのに二度ビツクリしましたよ」

最初は、何を言ひ出すのかしらといふやうな顔をして、大統領の世間話をきいて居たチエースは、フム、フムと、さも嬉しさうに合槌をうち出した。彼は、腹の中で、さすがの大統領も、自分の根氣のいゝのに負けて、今日こそ何かの官職をあてがつてくれる氣だなと早合點をしたのである。

「え、全く私の地方の者は、人間でも動物でも、皆根氣がいゝですよ」

「さうらしいですな」

といつて、ちよつと微笑したリンカーンは、

「だがね、チエースさん、こゝに一つの問題といふのは、あの根氣のよい熊蜂は、辛抱した甲斐があつて、結局あの枯れた薊から、おいしい蜜を思ふ存分吸ひとる事ができたかどうかといふ事です。私は今でもそれを疑つてゐるんですがね」

こゝまで一氣に言つたリンカーンは、

「いや、失禮しました。今日、ふと貴方のお顔を見ると、ニュー・ハンブシエアの郊外で見た熊蜂の事を思ひ出したものですから、つまらん話にお手間をとらせて申譯ありません。では、またお目にかゝりませう」

チエースの顔は赤くなり、青くなつた。だまつて頭をさげて、大統領の官邸を辭したチエースは、何事か思ひ當る事があつたと見えて、其の場で獵官運動を斷念し、即夜ワシントンを出發して故郷に歸り、専心、本職に精出したので、數年ならずして、町でも有數の資産家になつた。

## 大久保と桐野

明治の初年、遣韓大使派遣の廟議が破れて間もなくの事である。大西郷の股肱といはれた桐野利秋が、反對黨の大久保利通の邸にやつて來た。

書生に導かれて、大久保の室に通つた桐野は、つつたつたまゝ、

「お久しう！」

と挨拶する。大久保もたちあがつて、

「いや、ちつとも見えんぢやつたな、まア壯健で何より」

と、隔意ない挨拶。兩方とも鹿兒島辯まる出した。

「ハア、有難う。時に大久保どんに聞きたいことがあつて來もしたが、西郷どんをば、朝鮮へ問罪

使に派遣するのが、どこがわるいところでござすかな。俺どん、一向、合點がまゐらんが……」  
大久保の眉は、此の時、ビクリと動いた。

「そんな話ぢや、おはん、今日はやめやはんか。おはん、軍服着てサーベルさして来てござるとぢやないか。そいぢや軍人でござすぞ。軍人な、陛下の股肱で、陛下が右へ行け、左へ進めと仰せらるれば、御命のまゝ水火も避けず進むことが軍人の本分ぢやもん。政治に口出す職權はない筈ぢや。おはんが平服で、同藩の知合のよしみで聞きに来やつたなら、また話もなかこつぢやなかどん、軍服着て居つちやア、そげんこつ、聞かん方がよか」

理の當然に、さしもの桐野も押しかへす言葉はない。

「なるほど、尤なこつ。また出直して来もそ。今日は是れでおいとま。さよなら」  
そのまゝサツサと歸つてしまつた。

### 舌を抜かれた呆卿

唐の時代、常山の太守に顔呆卿といふ人があつた。安祿山が謀反したときくや、直ちに義軍を起

して反軍に當り、連戦連勝、一時破竹の勢を示したが、賊將史思明のために不意を襲はれ、遂に捕へられて賊の本營に送られた。

祿山は火のやうに怒つて、即刻、呆卿を面前に引き出させ、

「きさまは何といふ恩知らずだ。吾輩が取りたててやつたればこそ、今日の榮達が得られたのぢやないか。それを忘れて、吾輩に反くとは何事だ」

と面責した。呆卿は、縛られながら、祿山の顔を穴のあく程睨みつけて、

「さういふきさまこそ大の恩知らずぢやないか。きさまはもと營州の牧夫だ。見るかげもない賤奴からとりたてられて、三道の節度使に任ぜられたのは誰のおかげぢや、いふまでもなく陛下ぢやないか。海山にもかへ難い其の御高恩を忘れて、陛下に弓を引くとは何事だ」

呆卿の舌は火のやうに燃えた。

「きさまは吾輩を謀反人だと罵つたな。何が謀反人だ。吾輩はあくまで唐の臣だ。なるほど吾輩を推舉したのは、きさまかも知れないが、それを云々するのは私恩を賣るものだ。吾輩が受けた官位と封祿は、あくまで唐のものであつて、きさまのものではない。呆卿、不肖と雖も、私恩に心ひかれて大義順逆を誤るほどの愚人ではない。君國のため不逞の賊徒を討伐するのが何の不思議だ。謀

反などとはかたはら痛いわ」

痛烈、骨をさすが如き呆卿の言々句々に、祿山の顔は赤くなり、青くなつた。祿山は激怒に身をふるはしつゝ、臣下に命じ、先づ呆卿の肉をそがしめた。それでも呆卿は罵倒をやめないで、祿山は遂に絶叫した。

「そやつ舌を抜け！」

命令一下、無さん、呆卿の舌は引きぬかれて、血は瀧の如く口中から迸つた。さしもの呆卿もそのまゝ息は絶えてしまつた。祿山は呆卿の舌を抜く事はできたが、忠烈鬼神を哭かしむる英雄の魂までは引きぬく事ができなかつた。祿山は呆卿の舌と共に、自己の運命の芽も花も根も、めちやくにした事に気がつかなくなつたのである。

## 少年一休

一休和尚がまだ小僧時代、師のお供して、ある檀那の處にいつた。間もなくお齋(食事)になる。主人は一つ、一休を試み呉れんと、わざと一休にのみ魚類の膳を出した。一休は委細構はず、ペロ

りと平げて平氣でゐるから、主人、すかさず、

「墨染の衣を召された御僧の身で、よくも平氣でしたゝかに魚を食べられたことよ」

と云ふと、一休は卽座に、

「口は、鎌倉街道だから、貴きも行き、いやしきも過ぎる」

と答へてすまして居る。主人は何と思つたか、いきなり刀を抜いて一休の眼前につきつけ、

「かゝるものも通りまするか？」

「敵か、味方か？」

「敵でござる！」

「では通す事まかりならぬ」

「いや、味方でござつた」

「くせものが通るとて、只今俄かに關所がとざされたわい」

これには師の坊も一言なく、主人も唯々驚嘆するのみであつた。

無言の歡會

米國の文豪エマーソンが、歐洲漫遊の折、英國にカーライルの寓居を訪ねた。兩文豪の初對面だから、どんなすばらしい話が交はされるかと思つたら、カーライルは先づ賓客に煙草をすゝめ、二人とも黙したるまゝ深夜に及んだ。やがて別れる時、

「こんな愉快な晩はなかつた」

と異口同音、二人は堅い握手を交した。

極樂地獄問答

一方は、一代の名僧智識の譽れ高き澤庵禪師である。一方は、當時、白柄組の首領として、江戸八百八町に其の名をうたはれた水野十郎左衛門である。

「たかゞ生臭坊主、何程の事があらう。一つ、高慢ちきな鼻柱をくじいて、みんなこと狸の化けの皮

をひんむいてやらう」

これが水野の吐である。極樂、地獄があるかないかといふ質問だ。

水野「地獄、極樂といふものは、果してあるものですか、ないものですか？」

澤庵「愚納も知らんな」

水「御存知ない？ 地獄や極樂があるかないかさへ御存知なしに、よく後生を願はれますな？」

澤庵和尚はニツコリとせず、水野の顔をじつと見つめて、

澤「ちと此の方からもおたづねしたいが、貴殿は、雨天外出の際、どんな仕度をなさるかな？」

水「あたりまへの事！ 身には合羽をまとひ、馬に乗り、笠をいたゞいて参ります」

澤「うむ。晴天の日も同様かな？」

水「ハツ／＼。晴天の日に、雨仕度をする馬鹿がありますか」

澤「だが、いつ途中で、急に雨が降り出さないものでない。そんな時の用意はどうなさるな？」

水「その時の用意としては、笠と合羽を持参いたします」

澤「せつかく雨具の用意をしても、雨がふらなかつたら、どうなさるな？」

水「その時は仕方がない、そのまゝ持ち歸るばかりでござる」



澤「その儘持ちかへるくらゐなら、寧ろはじめから持参せぬ方が賢明ではあるまいかな？」  
水「それは無理でせう。雨が降るか降らないかは、いよく降り出して見なければ、分らないではありませんか」

澤庵禪師は、はじめてニコリと笑つた。

澤「同感でござる。我等が、後生を願ふのも同じ道理、地獄、極樂のあるかないかは、誰も豫じめ知る事はできぬ。もしあつたら、後生を願つた甲斐があるといふもの、なかつたらそれまでの事、たとひ徒勞になつたとて、少しも憾む處はないではござらぬか」  
さすがの水野も一言なく、赤面低頭して退いた。

### 小僧の求職

アメリカのピッツバーグ市の、あるさゝやかなる煙草屋に、チャールズといふ小僧がゐた。

或日、一人で店番をして居るところへ、立派な紳士がやつて來た。それは町の製鐵所の長官であつた。一眼見てチャールズの顔は、ブーツと赤くなつた。

「おまち遠さまでした」

といひながら、チャールズは、急いで棚から客の注文の品を取出したが、それを手にもつたまゝ妙にもちく／＼して居るので、紳士は不思議に思つて、

「どうかしたのかね？」

「旦那様、お願いです。私をあなたの下に使つて下さいませんか」

「使つてくれ……？ どんな仕事をしたんだね？」

「私、機械の仕事をしたいんです」

「機械の仕事……？」

といひながら、紳士は、小僧の頭の前から足の先まで見つめて居たが、

「機械の仕事は辛いよ。第一、暑いんでね。君のやうな子供にとまるかな？」

「え、どんなに苦しくつてもかまひません。私、きつとやり通します」

小僧の眉には、固い決心がきざまれてゐた。紳士は、小僧の手から注文のシガーを受取りながら、

「辛いだけならいゝが、給金が安いよ」

「旦那様、私は給金のために働きたいといふではありません。機械の仕事がしたいんです。どう

ぞお使ひ下さい」

紳士はまだ決心がつかないらしく、小僧の顔をじつと見つめて居たが、

「一日一弗だよ。私ならこの店で働いてゐた方が、遙かに樂で、割がいとと思ふがね」

「旦那様、私は自分に最も適當した職業だと信じ、やればきつとやれる仕事だと信じてお願いするのです。ベストを盡して働きますから、私をお使ひ下さい」

小僧の熱心と自信は、遂に紳士の心をヒツと捉へた。

「よろしい、承知した。いつでも、君の都合のいい時に、此の名刺を持つて私の所へたづねて來たまへ」

紳士は即座に自分の名刺を、無名の求職者に渡して立去つたが、その翌日、チャールスは、早速店から暇をとつて製鐵所の一職工となり、汗と脂で眞黒になつて働いた。後の管船局總裁チャールス・シユワツプ氏は、實に此の時の求職小僧、煙草屋の小僧から製鐵所の職工となつたチャールスであつた。

表情の力

大家の隠居があつた。大の氣むづかし屋で、その上大金持であつた。

或る時、店の小僧がびく／＼もので、

「御隠居様、お風呂が沸きました」

といふと、

「何？ きさまのいふことはちつとも聞えない。きつと、俺が聾だと思つて、口ばかり開いて見せるのだらう」

隠居がブン／＼怒り出したので、小僧は手眞似で桶をこしらへ、其中へはいる眞似をして見せると、隠居はいよく怒り出した。

「きさまは丁稚の身で、しかも手眞似で、主人の俺に、早く死んで棺桶にはいれとは何ごとだ」

小僧施すに術なく、番頭のところへ飛んで行つて、其の話をすると、

「ハツ／＼、お前がそんな顔をしてゐるからいけないのだ。よし／＼私が行つてやる」

番頭は隠居の前に行つて、顔だけはニコ／＼笑ひながら、  
 「やい、此の死に損ひの隠居奴、早く棺桶の中へはいつてしまへ、厄介者め！」  
 といつて、指で桶をこしらへ、中へはいる眞似をして見せると、隠居は急に機嫌を直し、  
 「うん／＼、さうかく、御苦勞々々。風呂が沸きましたか、それでは一つはいりませう」  
 といつて、喜んで湯殿に行つたといふ笑話がある。口以上に物をいふ表情の一例として、笑へぬ  
 寓話だと思ふ。

### おしやべり封じ

ベンジャミン・フランクリンが、まだ青年時代の話である。  
 ヒラデルヒヤからポストンへ旅行の途中、一夕、ある小さなホテルに泊つたが、その宿屋は、ま  
 ことに小ざつぱりした居心地のいゝ宿だが、主婦が、非常なおしやべりで、一度話し出したらきり  
 がない、従業員もそれにつれて、何かと根柢り葉柢りきく悪い癖があつた。  
 「あそこに泊つたら氣をつけたまへ。いゝ氣になつて相手をしてたら、何時になつても夕食にあり

つけないよ」

かう友人から注意されてゐたフランクリンは、宿につくなり、主婦をよんで、家中の人を一室に  
 集めさせ、しかつめらしい顔をして、咳一咳、

「私の名前はベンジャミン・フランクリン、職業は印刷屋で、年は十九歳、事務所はヒラデルヒヤ  
 にある。商用でポストンに行く途中だが、今晚は厄介になります。用のすみ次第、再びこゝに来る  
 のは一週間後でせう。以上で十分だと思ふが、もし尋ねたい事があつたら、今のうちにきいて下さ  
 い。なければさがつて食事の支度をして下さい。失禮しました」

フランクリンはさういつて、一同を廊下に送り出すなり、ピシンと鏡をおろして、その日の仕事  
 に取りかゝつた。

當意即妙の「おしやべり」封じ、機智の見本として面白いではないか。

### 王安石と太湖

新法を行はんとして、世論の反對を受けた宋の王安石の許に、

「太湖を埋めて開墾いたしましたら、莫大な利益でござりませう」と獻策した者があつた。元來かうしたこと好きな王安石は、直ぐこの説を可とし、早速土地の人々を呼び寄せて、

「どうすれば太湖の水を乾すことが出来るだらうか？」

と相談したが、誰一人答へる者もなかつた。すると一人の老翁が、

「左様、太湖の傍に、太湖と同じ大きさの湖を掘つて、それへ水を落したら宜しうございませう」

「うーむ」

「さすがの王安石も、これには一言もなかつた。議はそれなり沙汰やみとなつた。皮肉もこの位になると痛快だ。」

### 政宗の一喝

關白秀次が、父太閤の忌諱に觸れて自裁した時、秀次と仲のよかつた大小名は、片ツばしからお咎めを蒙つた。奥州仙臺の城主伊達政宗もまた、「おたづねの筋あり、即日上げせよ」とのお召状を

受け、取るものも取りあへず、十人あまりの家來を従へ、奥州路から大坂へはせ參する途中、枚方の宿につくと、早くも施薬院、石田、富田の三人が、太閤の内命により、下調べのためにやつて來た。

隻眼ながら胆斗の如き鬼政宗である。悠々として少しも騒がず、使者を上座に迎へ、謹んで上意を承つたが、徐ろに開き直つて、

「殿下御不審の廉はそれだけでござるな。政宗篤と承りました。なるほど、拙者は秀次公とは大の昵懇であつた。それが何の不都合でござるな。秀次公は關白ぢや。太閤殿下が御隠居を遊ばされ、秀次公が代つて關白の位にお即きめされた。今後は秀次を予と思つて、相變らず忠勤を勵んでくれよといふ上意を受けたればこそ、身命を賭して秀次公に御奉公申上げたまでの事でござる。良禽は良樹を選ぶ。政宗、其の方は人を見る眼がないなどのお叱りならば、政宗、まことに一生の不覺、赤面の外はござりませぬが、恐れながら此の點では、殿下とてもあまり御威張りになれぬかと存じます。その證據には、御兩眼が人一倍——否、千百萬倍勝れて鋭く、明るくわたらせらるゝ太閤殿下でさへ、お見損ひ遊ばされて、天下を譲り、關白の位にまでおつけなされた秀次公ではござりませぬか。まして野武士の政宗が、しかも不自由な片目で見損つたとて、格別不思議はないと思ひ

ますが如何でせうな。

それとも、たつて、片輪者の政宗が、秀次公を見損つたのが怪しからん、殿下の御命のまに、忠勤を勵んだのが不都合だと仰せられての斷罪ならば是非がござらぬ。討首なり、切腹なり、いかやうにも存分に御處分願ひますと、殿下に申上げて戴きたい」

お使者の三人は色を失つた。これではお詫どころか、辯明にもならない。中にも施薬院はたまりかね、

「政宗殿には狂氣でもめされたか、そのやうな暴言を殿下のお耳に入れたら、それこそどんなに御立腹遊ばされるか知れぬ。それを存ぜぬ貴殿でもあるまいに……」

「お黙りめされ？」

と政宗は一喝した。

「政宗、狂氣もせねば逆上もいたさぬ。貴殿は醫者ぢや、病人の脈を診る事は上手であらうが、武士道については素人も同様と推察いたす。唯だありのまゝを殿下にお取次ぎ下されば、それでいいのぢや。御役目御苦勞に存じ申す」

政宗はかういつて、片目をカツと見ひらいて、施薬院の顔を睨みつけた。

三人は這々の體で立歸り、その旨を太閤に復命すると、烈火の如く激怒されるかと思ひの外、秀吉は至極上機嫌で、眼を細くして笑ひながら、

「ハツ／＼、政宗め、そのやうな事を言ひをつたか。いや、わかた／＼」

といつたツきり、二度とその事については何事も言はないばかりか、翌日、政宗が参邸すると、直ぐに居室に通して手づからお茶をたまはり、四方山の物語あり、政宗が辭して歸らうとすると、

「うむ、そしていつ歸られるな。何、御用のすみ次第？ ハツ／＼、用事はもうすんだ／＼、それよりも其方が居らいでは奥州が心許ない。明日にでも歸るがよからう。いや遠路、大儀であつた」

瞬間、政宗の隻眼には、何やら光るものが宿つた。英雄、英雄を知る。政宗の大膽、秀吉の大度、兩者の座談に一脈の清風を添ふるものは、武士道の精華である。

## 自家撞着

「君達は知るまいが、スイスのワイバハといふ所は、世界一の閑静な所だよ」

「へえ、さうですかね」  
 「さうとも、だから閑静を好む人々がみんなこゝへ集るのだ」  
 「すると？」  
 「世界各国から閑静好きな人々が集つて、此の地方一帯が、閑静好きな人々で埋められてゐる程だよ」

### 景時と重忠

頼朝が奥州征伐の時、宇佐美實政が、泰衡の郎黨で大剛の譽ある由利八郎を生擒にし、頼朝の本營に拉致した。すると間もなく天野右馬允則景から、八郎を生擒したのは自分であると異議を申立てた。頼朝は、早速、梶原景時に命じて實否をたゞさせる事にした。

景時は、即日八郎を面前に呼出し、

「汝は、泰衡が郎黨中でも名あるものである。嘘偽を申してはならぬぞ。有體に言上せよ」と言ひ渡した。八郎はそれをきくや、勃然として怒つた。

「黙れ、無禮者め！ 故御館(泰衡)は、秀郷將軍嫡流の正統、已に三代鎮守府將軍の流れを汲める家柄である。吾はその重臣である。鎌倉殿と雖も斯くの如き言葉を發すべきでない。勝敗は兵家の常だ。運盡きて囚人になつたのに不思議はない。然るに今の訊問ぶりは何事だ。汝のやうな無禮者の間には、一切返答せぬからさう思へ」

と云つたきり、口を開かない。暴慢無類の景時も、もてあまして頼朝に仔細を言上すると、頼朝は幾度かうちうなづき、

「八郎が云ふ所尤もである。汝が無禮な糺明をしたから、八郎が答へぬのぢや。改めて畠山重忠に糺明を命ずる」

重忠は練達堪能の士である。先づ手づから敷皮を取り、さて禮を正してきいた。  
 「弓箭にたづさはる者、怨敵の爲に囚はるゝは、間々あること、必しも勇士の恥辱とは申されぬ。我等の主人鎌倉殿も嘗ては囚人として伊豆へ配流の憂目を見たが、機運は再び源家に幸ひして驕る平家を西海に滅ぼし、めでたく天下を治め給ふことに相なつた。貴殿今日の窮境は、まことに同情に堪へないが、蛟龍いつまで池中のものならんや、そのうちにはまた御運の開ける時もあらう。せつかく御自重が望ましい。それだけに、鎌倉殿にも特別の御心づかひ、貴殿を捕へた勇士の間に、

勳功の争ひが起つて、裁断に困つて居られる。兩者の論争は貴殿の一言によつて定まる。承り度きは、當日、貴殿が武功を譲られたる、勇士の甲の色、鎧の色、馬の色、御記憶あらば御洩らしに預りたし」

慇懃を極めた畠山の辭令は、俘囚の心をヒシと捉へた。

「さてこそ貴殿は音にきく畠山殿よな、事理を分けたる御質問、今は何をか包むべき、當日吾等に眞先きに立ち向ひたるは、黒糸絨の鎧を着、鹿毛の馬に騎つたる勇士に相違ござらぬ。第二、第三の者にいたりては、混亂の際、見覚えはござりませぬ」

黑白はこの一言によつて判明した。八郎を捕へた勇士は、まぎれもなく實政と分つて、過分の恩賞を賜はつた。

## 大砲と大喝

昔、禪宗の名僧に、心越禪師といふ人があつた。

水戸黄門光圀公、ある時禪師を試さうと思つて、特に禮をあつくして奥書院に招じ、山海の珍味

をならべて禪師をもてなした。

「何はなくとも、まづく一献！」

「有難うござる」

小姓になみくくとつがせて、いざ口をつけようとした時、突然隣室でズドンと一發、大砲を打ち出したのである。

これには、いかな名僧智識でもビックリするだらう、盃をとり落すだらうと思ひの外、禪師は眉一つ動かさず、平然として落つきはらつたまゝ、滴一つこぼさず、きれいに飲みほして一揖した。

「さすがは禪師、えらいものだ」と、感心された光圀公は、

「やア、大きに失禮いたしました」

と、挨拶されると、禪師は、

「なに、大砲の稽古は武家の常ぢや。御遠慮には及びませぬ」

といつて返盃した。光圀公も快く受けて、いざ口をつけようとした時、禪師は突如大喝、

「喝！」と言つた。光圀公がビックリして、思はず盃を取り落すと、

「失禮いたしました。喝は禪家の常でござる」

禪師は、ニコリともせずかういつて、靜かに衣の袖を直した。

ソクラテスの問答

ソ「人は偽る事があるか？」  
 ヌ「左様、人はしばしば偽るものです」  
 ソ「偽りは、正不正何れに屬するか？」  
 ヌ「それは不正に屬します」  
 ソ「他にむかつて悪を爲すは正か不正か？」  
 ヌ「言ふ迄もなく不正です」  
 ソ「公民が奴隷を賣買するは正か不正か？」  
 ヌ「勿論不正です」  
 ソ「然らば將軍の敵國へ攻め入つて、その都市を剽掠し、その都民を虜にするは正か不正か？」  
 ヌ「それは、不正ではありません」

ソ「將軍が敵を偽るは善か？」  
 ヌ「其れは善です。しかし之を友人間に行つてはいけません」  
 ソ「然らば正と、不正とは、敵に行ふと友人に行ふとの差ある許りか。若し然りとせば、將軍が沮喪せる兵氣を勵まさん爲、偽りて援兵來ると云ふは正か不正か？」  
 ヌ「それは正です」  
 ソ「若し小兒病に罹り、服藥を厭ふ時、父母が詐りて、甘味なりと吞ましむる時は正か、不正か？」  
 ヌ「之も正です」  
 ソ「汝の答ふる處を考へてみよ。友人や親しき者に對しても、詐りをいふも不可なしとの結論に達せざるか、改めて問はん、過つて人を詐ると、故意に詐ると、何れが不正なる？ 汝の正なりと云へるものは、悉く故意に詐れるものに非ずや」  
 ヌ「われ答ふる能はず」  
 問ふものはソクラテス、答ふるものは、青年ユウチユデーモスである。



## デモスセネスとゼスチユア

演説や座談には、どれだけゼスチユアが大切かといふ例にデモスセネスを引例する。

デモスセネスが雄辯家であり、又世界雄辯界の先覺者たる事は、雄辯史を讀む程の人は誰も知つて居る。

けれども雄辯彼の如き人も、決して生れながらの雄辯家ではなかつた。唯彼は演説好きであつたし、演説に相當の自信を持つてゐた。

處が或る日、彼は招かれて民衆集會場で一場の演説をした。然るに民衆は、彼の演説に耳を藉さうとしないのみか、八方から野次が出て、しまひには演壇まで野次の占領する處となつた。彼は心平かならず、悄氣きつて歸宅の途についた。其の途中、彼は友人である俳優サラチスに會つた。サラチスは彼の失敗談を聞いて、カラ／＼と笑つた。

「そりや無理はないよ。君は演説が好きで、演説となると、まるで狂氣ひじみる程熱心だが、惜しいかな、演説に最も大切な要素が缺けてゐる。率直にいへば君の演説にはゼスチユア——表情や身

振が足りない。先づ試みに、君の知つてゐる劇詩を讀んで見たまへ」

かう云つて彼は、詩の一節を朗讀させた。その後で自身で同じ劇詩を朗讀してきかせたが、文句や表現法は同一だが、その態度、その表情は、まるで違つてゐた。

「成る程うまいものだな」

とデモスセネスは思はず驚嘆の叫びをあげたのである。彼は灑然として悟ると同時に、一心にゼスチユアの研究に没頭した。それ以來、彼は外出の出来ぬやう、頭髮を半分剃り落して、地下室に入り、毎日々々大きな鏡の前に立ち、一意専心、表情や身振りの研究をしたのである。彼が世界第一の雄辯家になる迄には、それほどの苦心をしたのである。

## お尋者が玄關番

石井蘇山氏の著「大西郷の心の奥底」の一節に、山岡鐵舟、大西郷、川路大警視、古莊嘉門、四人の痛快奇抜なる問答がある。座談の参考として面白いと思ふから、その一節を、ぬき／＼借用する。

明治五年の春、四月頃と覚えて居る。

山岡鐵太郎君が、侍従でまだ赤坂へ移轉せぬ前、淀橋の宇天狗山といふ、ちよつと丘陵状をなした所に居られた事がある。(中略)著者(石井氏)は、西郷先生のお供をしてそこに行き、先生と山岡さんが剣道や禪學の話をして居らるゝのを聞いて居るところへ玄關番がやつて来て、

「川路大警視が來られて、山岡先生に御面會したいと申しましたが」と取次いだ。

「川路利良の名は聞いて居るが、まだ逢うた事がない。もしや西郷先生との間違ひぢやなからうか。山岡というたのかい？」

「ハイ、確かに、山岡先生御在宅なら、御面會願ひたいと申しました」

「さうか、それぢや通しなさい。西郷先生、お差支へございますまいな？」

「川路は國の者で、知つちよりますけん、ようごわす」

間もなく川路大警視は、玄關番に案内されて、玄關から眞直ぐに、二間ばかり隔たつて居る奥座敷へ入つて來た。

先づ山岡さんに初對面の挨拶をなし、次に西郷先生に會釋をして、改めて山岡さんに向ひ、

「時に山岡先生、今日、突然伺ひましたのは、外の用ではないでござす。貴宅に古莊嘉門を隠匿して置かるゝと聞きましたからで。その古莊は、現今、廣澤參議暗殺に關係あるやの嫌疑で、お尋ね者になつて居りますで、現に全國に配符(其の時分は寫眞でなく、人相書の配符)が廻つて居ります。山岡さんな御存じでお置きになつてゐるでござせうか。實は係の警部が参りまして、伺ひたいと申しましたが、貴官は侍従であり、天下に隠れなきお方であるので、他の者を差出しては失禮と存じ、態々私が伺ひましたか」というた。

「あゝさうでござりましたか。あの古莊は、十日ばかり前に、勝の處から勝の依頼状を持つて來て暫く置いて貰ひたいと申すので、その儘差置きました。勝の手紙には、古莊は、人を暗殺する程の馬鹿ぢやないと書いてあるので、私はさうと信じて差置きましたか……」

「イヤ、役所の方でも嫌疑ではあるし、餘程控へ目にやつては居りますが、私が唯今御玄關へ参りお取次ぎを願ひますと、その玄關番がいかに人相書の古莊に似て居りますで、失禮ですが、貴公の御姓名は何と申されますかと聞きますと、私は古莊嘉門と申す者でござると臆せず答へられ、私も一時當惑しました。お差置きになるにしても、他の處へでも置いて下さればまだしも、あのまが

ひのない痘痕斑々として鍾馗然たる面相を玄關先きに曝して置かれては、聊か警視局へ面當てにもなり、お尋ね者の古莊は、こゝに居るぞといはんばかりで、私、職掌上大いに迷惑しますぢや」  
山岡先生は笑ひながら、

「いや、御もつとも、私もそれを本人に注意しましたが、隠すより顯はるゝはなしで、いつまで隠れて居られるものでもありません。本ばかり讀んで居ては退屈でもあり、いつそのこと玄關番しませうと、本人がたつての希望、貴官が御迷惑なら引き込ませませう」

先刻から傍で、ニコリ／＼笑ひながら聞いて居られた西郷先生は、此の時始めて口を出されて、  
「そん、古莊ちふ男は、面白かやつなア、自ら進んで玄關番するなどは、通常人に出來ぬわい。川路どん、いつそのこつ、こけへ古莊ばよんで、調べ見んかい？」

これには、聊か川路大警視もまごついて、

「私がかゝで調ぶるちうち、そらア、ちよつと困りますなア。私やそばで聞いて居ますから、何の關係もなか先生から、話のやうに訊いて戴くことは出來ますまいか」

といふと、先生は笑ひながら、

「又一段と面白いな。俺どん、一つ、警部の眞似して見ようかな。山岡さん、どうかい？」

「そりや、いつでもこゝへ呼びますが」といふわけで、早速呼びにやる。山岡先生は、出て來た古莊を顧みて、

「古莊、こゝにござるのは西郷大將であらせらるゝが、貴公が勝の處から來たといふので、會ひたいと仰せられるで、呼んだ譯だよ。挨拶申上げなさい」

「さやうでござりますか。私は天下のお尋ね者の古莊嘉門でござります。先生の御高名は、九州に居る時から承つて居りましたが、始めて拜顔いたします。以後宜しくお引きまはしを願ひます」

「ハイ／＼、俺どん西郷でござす。おはん、熊本人ちふな」

「ハイ、熊本でござります」

「熊本ぢや、誰々とお友達でござしたな？」

「私は勤王開港黨の方で、鎌田景範、早川景矩、轟武平、森尾履素共は、同志たり、朋友でござります」

「ほう／＼、そりや俺どんも皆知つちよる人達たい。おはん、勝どんの處へ行かはつて、勝どんな何といひなさつたな？」

「ハイ、勝さんが仰有るには、苟くも武士たるものが、不淨役人の手にかゝつて調べらるゝのは、

そりやいやだらう。嫌疑なりや、いつかはれるに違ひない。當分山岡さんの處へ行つて居るがよいと仰しやつて、それで御當家へ厄介になりました」

「フーム、友人の鎌田も早川も、皆判事しちよるが、おはんも何か勤めて、忠誠を抽んでにやなりますまいがな」

「ハイ、御尤もにござります。私も刑名の學には早川と同學で、少しは研究致しましたから、役にもたちますまいが、其の道で仕官したいと思ひ居りますが、お尋ね者で、それも暗殺の嫌疑といふのでは、いつまでたつても仕官などは出来んと思ひます。身、不肖ながら武士の端くれであります。論戦も試みず、唐突に人を暗殺するなんといふ愚物ではない積りであります。元來廣澤さんとは面識もなく、恩怨ふたつながらない人ですから、従つて暗殺などする譯がないのですが、警視局では何でも私が怪しいと睨んで居るのださうで、……嫌疑なら仕方ないでござります」

西郷先生は幾度かうなづいて、

「刑名の心得があれば丁度よか。俺どん、江藤司法卿さん手紙あげるけん、もつて行つて見なはれ。判事位にやなれるだらう。嫌疑も司法省から出た嫌疑なら、直き解けさうなもん。おはん、俺どんが見ちやア、人を暗殺するごたる人ぢやなか」

川路大警視もきいて居たが、何とも言はなかつた。西郷先生は早速江藤卿への紹介状を認めて古莊に與へられた。此の古莊こそ、先生の紹介で司法省七等出仕をふり出しに、後、書記官となり、縣知事となり、至る處で良二千石の令名を博した男である。西郷先生の人を見るや、直覺的に其の性情を映射して過たず、且つ舊知未知の如何に關せず、人材は直ちに國家の用に供せんとせられた事は、此の一事を見てもわかる。

### 悪漢と悪漢

千八百年代、英吉利の劇作家にシェリダンといふ人があつた。後、政界に身を投じ、雄辯家として鳴らしてゐた。殊に彼が、印度の怪傑ヘスチングを攻撃した大鐵槌、彼の骨を削り、彼の肉を殺いだといはるゝ彈劾演説は、シェリダンの名に九鼎の重きを加へたといはれて居る。

彼は或年の代議士選挙に、政敵パウルを向ふにまはして立候補を宣し、直ちに選挙區を遊説すべく、單身、先づウエストミンスター州に向つたが、その途中、乗合馬車の中で、見知らぬ二人の紳士と同乗した。

旅のつれづれから、乗客の談話は期せずして選挙戦に及んだ。二人とも同州の選挙人らしく、頻りに政界の消息などについて語り合つてゐたが、やがて甲が、

「時に、君は誰に投票するかね？」

とたづねた。すると乙は、

「まアパウルだね。あの男も大した人間でもなささうだが、他の候補者は、どいつもこいつも碌でなしばかりだからな」

と答へた。

「シエリダンはどうだい？ あの人所中々の人物ださうぢやないか」

「だめ／＼、あいつは君、非常な悪漢だといふからね」

「悪漢？ 君はシエリダンといふ男に會つた事があるのかい？」

「いや、會つた事はないが、パウルの友人から聞いたんだよ。僕は、そんな悪漢とつき合ひたくないからな」

シエリダンは、そばで黙つてきいてゐたが、やがて一行は、とある宿場に休んで朝食をとる事になつた。

その時シエリダンは何と思つたか、甲の紳士を木かげに招いて、

「甚だ失禮ですが、あなたのお連れ、あの快活な紳士はどなたですか、今まであんな愉快な方に御目にかゝつた事ありませんので、お名前を知つて置きたいと思ひまして」

といふと、甲は、

「あゝ、あの男ですか、あの男はね、リンコルス・イン・ヒールドに事務所を持つてゐる、T・ネルソンといふ、土地では可なり有名な辯護士ですよ」

と教へてくれた。

「はア、さうですか。有難うございました」

シエリダンは、何気ない體で、そのまゝ朝餉をすまして再び皆と一緒に馬車に乗つたが、胸に一物あるシエリダンは、わざと、先刻自分を攻撃したネルソンといふ辯護士の隣に腰かけて、罪のない世間話に打ち興じて居たが、一人が、いろんな職業のうちで、何が一番よいかといふ問題を出すと、議論は期せずして沸騰した。

甲の紳士はいつた。

「そりや、法律事務ですよ。法律家は少し頭がよければ、一國の最高位にもなる事ができますか

らね」

「さうです〜」

と、シエリダンは直ぐに共鳴した。

「我が國の歴史を讀んで見ても分りますが、由來大政治家や大人物は、大てい一度は辯護士をやつた人ばかりですからね」

「さうばかりでもありませんが……」

と、ネルソン辯護士は、さすがに面はゆげに謙遜した。

「いや、確かにさうですよ」

と、シエリダンは、わざと熱心に主張した。

「のみならず、歴史上、有徳、尊貴の大人物は、大てい辯護士出身ですよ。その代り……」

といつて、じろりとネルソン辯護士の顔を見て、

「その代り辯護士には悪漢も多いですね。悪漢にもいろいろあるが、辯護士の悪漢と來たらとても厚顔無恥ですからね。その意味で、悪漢中の悪漢は悪辯護士だといつても差支へないと思ひますね。中にも、現にリンコルス・イン・ヒールドに住んでゐるT・ネルソンといふ辯護士は、悪漢中の

悪漢だといふ評判ですよ」

それをきくと、ネルソン辯護士は烈火の如く怒つて、さつと席からたちあがつたかと思ふと、突如、シエリダンの腕をつかんで、

「失敬な事をいふな、失敬な事を！ 悪漢とは何だ、悪漢とは？」

と怒鳴りつけた。

シエリダンは、わざと空とぼけたふりをして、

「ど、ど、どうしてそんなに怒りになるのです。私はあなたを悪漢といつた覚えはない。リンコルス・イン・ヒールドに住んでゐるT・ネルソン……」

「そのT・ネルソンは私だ！」

聞いて驚くかと思ひの外、シエリダンは、待つてましたといはんばかりに、ポケットから一葉の名刺を取出して、ネルソン辯護士に手渡ししながら、

「さうですか。私は、さつき、あなたから同じく悪漢呼ばはりを持たされたシエリダンです」

と名乗つた。呆氣にとられたネルソン辯護士は、渡された名刺とシエリダンの顔を等分に眺めて、やゝしばらく口をもぐ／＼させてゐたが、やがてカラ／＼と笑ひ出した。シエリダンの當意則

妙のしやれが分つたのである。

「いや、失禮しました」

ネルソン辯護士は、いきなり右手をシエリダンの前に差出した。

「いや、私こそ失禮しました」

シエリダンも隔意なく、其の手をしつかりと握つて、幾度か強くうちふつた。

奇縁は兩人を結んで莫逆の親友たらしめた。ネルソンは早速その日からシエリダンの熱心なる支持者となつて、あらゆる機会に、彼のために犬馬の勞を盡した甲斐あつて、シエリダンはみごとに政敵パウルを蹴落し、立派に當選の榮を勝ち得たのであつた。

(交渉座談術 奥附)

昭和六年十月十一日印刷  
昭和十四年四月三日發行

定價壹圓五拾錢

送料 内地 十四錢  
函購 十八錢

所有者行發は權作著書本

製復許不



編者	大日本雄辯會講談社
發行者	高木義賢
印刷者	奈良直一
印刷所	株式會社常磐印刷所

發行所

東京市小石川區  
音羽町三丁目一九

株式會社

大日本雄辯會講談社

電話(34) 代表 五三〇〇・六一〇〇  
牛込 六二〇〇五

(振替口座東京三九三〇番)

本製地海天

最も容易に、最も迅速に、最も愉快に雄辯に達せんと欲する者に奨む。正に之こそ辯論指導書として最高の權威書！

# 雄辯法講話

加藤咄堂先生著

四六判 五二頁 洋裝函入

定價 二圓 送料十四錢

兵法に孫子あり、雄辯に雄辯法講話あり

本書を一讀して演壇に立たば、大喝采大成功疑ひなし！更に文章を作り、思想を練る上にも有力なる参考書となり、立身の扉を開く秘鍵となるであらう。

演説に、座談に、雄辯に、成功なし！  
 壇上生活五十年に及ぶ著者がその研究その著を傾けし本書の聲價は今日既に定評のもの。辯論に志す凡ゆる人々の必讀すべき大名著。

### 内容の一部

- ▲雄辯と人の本能
- ▲雄辯の原理と應用
- ▲雄辯と詩と哲學
- ▲雄辯と世態人情
- ▲雄辯の三大分類
- ▲孟子の問答法
- ▲支那道徳と雄辯
- ▲社會制度の影響
- ▲羅馬の雄辯
- ▲言論の國文の國
- ▲觀衆心理の基礎
- ▲群衆としての觀衆
- ▲ブルータスの演説
- ▲演題の未定
- ▲思想の整理と立案
- ▲組立の諸形式
- ▲和歌應用の例
- ▲悲哀美、悲壯美
- ▲自然美の表現
- ▲解説の利便と資料
- ▲文法上の明確
- ▲雄辯としての聲音
- ▲所謂五分間演説
- ▲壇上の姿勢
- ▲ゼスチュアの効用
- ▲雄辯は人格の露露
- ▲大隈重信侯の演説
- ▲演題選定の心理
- ▲表現の時間と思想
- ▲觀衆心の特徴
- ▲群衆心の共通
- ▲滑稽の興味
- ▲表情的身振り
- ▲辯士紹介の仕方

此外目次數百項

萬人熱望の大快著！公務に社交に、隨時隨所に、直に役立つ實益書！

# 實用式辭挨拶演說集

大日本雄辯會講談社編

四六判六〇六頁

定價一圓八十錢

送料内地十四錢

我々の日常生活に於て本當に利用が出来るやうな至便重寶な挨拶集を完成したいといふ大方針の下に苦心立案、數百篇の實演原稿を精選し、更に新原稿百數十篇を加へ實に堂々三百五十五篇を收載、正に完璧無比の理想書完成

大別内容概観	
祝賀篇	入社・入會・入學士篇 五篇 除隊兵 五篇 成功者・團體 六篇 新任者 十篇 名士・巡視官 二篇 送別篇
叙勳・學位 五篇	友人・同僚・後進 八篇 殉職・殉難・戰歿 七篇 功勞者・公職者 六篇 追悼會・祭典 七篇 勸勵篇
卒業・就職 七篇	忘年會・新年會 五篇 縣人會・同窓會 六篇 同人會・同好會 四篇 就任・辭任 九篇 表彰篇
記念・竣工 十五篇	同業・同好會 四篇 就任・辭任 九篇 表彰篇
落成・竣工 十五篇	同業・同好會 四篇 就任・辭任 九篇 表彰篇
披露篇	同業・同好會 四篇 就任・辭任 九篇 表彰篇
結婚・開業 二十篇	同業・同好會 四篇 就任・辭任 九篇 表彰篇
開店・開業 九篇	同業・同好會 四篇 就任・辭任 九篇 表彰篇
喪名・引退 四篇	同業・同好會 四篇 就任・辭任 九篇 表彰篇
歡迎篇	同業・同好會 四篇 就任・辭任 九篇 表彰篇
恩師・先輩 六篇	同業・同好會 四篇 就任・辭任 九篇 表彰篇
謝恩・慰勞篇 八篇	同業・同好會 四篇 就任・辭任 九篇 表彰篇
勸行者 七篇	同業・同好會 四篇 就任・辭任 九篇 表彰篇
發會創立篇 七篇	同業・同好會 四篇 就任・辭任 九篇 表彰篇
細目一々は直接本書によつて知られたし	同業・同好會 四篇 就任・辭任 九篇 表彰篇

特別記 本書は更に讀者演者の利便の爲に、特に斯道の第一者安倍季雄先生に乞うて各大別篇毎に懇切なる解説を附し、慣例、用語、方式、作法等萬般の心得を示しあり



新時代に活躍せんとする士は来り見よ！ 人生生活のある所社交あり、社交ある所座談と式辭挨拶あり、左の三者、正に社交裡即應自在の絶好書！

### 模範的 五分間演說集

大日本雄辯會講談社編  
定價一圓八十錢・送料内地十錢

登壇先づ演壇の整備、加藤忠實氏の「五分間演說の急所と要領」の一文と、安倍幸雄氏の「式辭挨拶に最も大切な心得」の懇切明快なる諸注意を録し、本文には近衛文麿、野間清治、高島米庵、高田早苗、山室軍平等現代各方面諸名士の模範的演說例百有餘篇を收め、更に附録として社交禮法一般の心得を添へて、眞に萬人必携、任意活用に便する絶好の参考書。

### 式辭 十分間演說集

大日本雄辯會講談社編  
定價一圓八十錢・送料内地十四錢

現代に活躍せんとする者は、誰でも、一寸した挨拶、簡単な演說位の心得がなくてはならぬ。本書はすべて現代各方面に活躍する諸名士が、社交上凡ゆる場合に於て實踐せる名式辭名演說、名挨拶のみを精選の上、これを新年會、忘年會、結婚式等二十四項目に分ち、何人にも如何なる場合には、如何なる挨拶をなすべきかを懇切明瞭に示した即席演說の最上の虎の巻。

### 美談逸話集

大日本雄辯會講談社編  
定價一圓五十錢・送料内地十四錢

全卷悉く東西古今の傳記史譚より精選した珠玉集！ 或は千古に輝く偉傑、聖賢文豪の最高潮の場面、或は一流一派の興衰を極めた達人巨匠の秘話、或は一世を動かした大英雄の苦心險略、或は花にも曇るべき麗人賢女の実話佳話、或は市井に霞ふ男一匹の任侠義闘等、一讀感奮興起する不朽の談話滿載、眞に本書こそ演說資料として、雄辯家の見逃し難き稀有の寶庫！

雄辯に志す青年は讀書の青年であり、修養の青年であり思索の青年であり、鍛練の青年である。雄辯の練習は直にこれ人格の修養であり人物の鍛練である（加藤忠實）

### 昭和青年雄辯集

大日本雄辯會講談社編  
定價一圓三十錢・送料十四錢

昭和青年の思想と抱負と大雄辯とを萬代に傳ふる名篇。之を皇國の中核たる青年の眞の叫びであり、新日本建設の嚆矢である。戰後八十餘篇、一々斯界最高權威者の講評を附して、雄辯の實質と吟味の要道を示し、簡附録として「雄辯法三講」を添ふ。

### 現代青年雄辯集

大日本雄辯會講談社編  
定價一圓五十錢・送料十四錢

學堂に、農村に、商店に、工場に、營々として活動の素地を築きつゝある大下青年男女の烈々たる氣魄、燃ゆるが如き意氣政治、經濟、國防、社會、労働、農村、婦人等、凡ゆる問題を捉へて深刻明快に批判し論破した大雄辯八十餘篇を收む。

### 現名家大演說集

大日本雄辯會講談社編  
定價一圓五十錢・送料十四錢

現下日本の重寶を資ひ、各方面に活躍する代表的人物三十餘氏が、一齊に奮起して各般に渉る刻下の重大問題を縱横に論破し、喝破し、天下に呼號せる空前の大演說を收む。緊切なるその内容、堂々たるその論旨、雄辯人必携の名演說集である。

野間清治著 世間雑話

出世繁昌の源は實に日常生活の手近な心掛にある事を、著者半生の體驗から割出して述ぶ。例話澤山、興味津々の裡に無限の味ひあり、一々何人の胸にも沁み徹る感懐の名著

野間清治著 野間清治短話集

家庭教育の重任を負ふ主婦、並に子女の方々に對し、誰にも解るやう面白く、家庭の向上發展について著者の抱負を述べられたもので、萬人必讀の家庭讀本である。

野間清治著 榮えゆく道

野間社長が血涙努力した事業經營の體験と研究を披瀝して一意世のため人のためにと、あらゆる方面から繁榮の道を説き事業道德の根本を明かにした名著。

野間清治著 修養雑話

雑話といつても一時的の偶感ではない。全篇悉く愛と涙とを以て説いた、尊い體験より出た實際談である。昭和の心學道論であり、正に人物練磨の指針書である。

野間清治著 出世の礎

著者が實際の體験に基いて「斯うすれば必ず成功する、必ず出世する」と信する點を眞實に示されたもの。活きた世間學、直ぐ役に立つ出世修養の秘訣。

野間清治著 處世の道

世渡りの呼吸を平易に説く。一字一句胸に響き成程と頷かれる。單なる理窟や例話空談ではない。これこそ難關突破の尊い體験から生れた處世の活指針。

野間清治著 體験を語る

著者二十年間の血と汗の滲み眞剣な體験を述べられたもので、未だ嘗てどこの學校でも教へられず、どんな書物にも書かれたことがない活きた世間の學問である。

武藤山治著 武藤山治百話

傑一貫から大事業家となつた苦勞人の著者が、胸襟を開いて事業のこつ、成功の道、社會と人生を語つたもの、引例豊富で解り易く、誰か讀んでも面白い萬人必讀の名著。

徳川家蔵版 大日本史

本紀、列傳、志、表全三百九十七卷を十七巻に纏め、水戸學の大家によつて兩註傍訓を施す。眞に空前の完本、千古不磨の大史籍、日本國書の精華である。

大日本雄辯會編 明治大帝

明治大帝の側近に奉仕された高位顯官、女官侍臣、名士の方々が大帝の御體行の御有様につきて細大洩らさず謹述せられたもの。附録の「明治美談」亦明治時代の巨人を偲ぶ。

千葉胤明著 明治天皇御製謹話

明治天皇の偉大なる御「慈」と御威徳を仰ぎまつる御製の聖意をお歌所寄人として明治、大正、昭和の三朝に歴仕せる著者が全心全意を捧げ謹話された感激無限の御一代記である。

宮内省監修 昭和天覽試合

昭和九年五月執行はせられたる皇太子殿下御誕生奉祝武道大會の實況を詳に描寫し、別巻には古來の武道極意書傳書に當代の名達人が體得せる秘奥を續録す。

宮内省監修 昭和天覽試合

宮中に於ける天覽武道大會の記録にして、本巻一千餘頁、別巻四百六十二頁、武道諸流系圖、達人出身地圖、劍道葉道圖、武道訓、全國武道家名鑑等を收む。

藤本尚則著 頭山滿翁寫真傳

至誠純忠の巨人頭山滿翁の青年時代の今日に至る迄の閱歴及國家的、民族的、世界的活躍の跡を徳と約二百の大寫眞帖に偉大な翁の嚴密温容に親み比類なき大信心に觸れる。

大日本雄辯會編 美談逸話名訓集

東西古今の美談逸話三百五十餘篇と最も感銘深き名訓名句八百餘句を二十九の題目に分ちて興味と感懐の裡に何人にも親しみ易き修養の好資料たらしめた世渡りの絶好指針書

下村人著 論語物語

平明にして詩味豊かな物語の中に、讀者は現代の人として生かされた大聖孔子に面接し、さながら其肉聲を聞く如く容易に論語の精神を味讀し得る。附録讀下し論語全文。

武者小 路實篤 著 トルス トイ

日本のトルストイと云はれる著者が、多年私淑せる大トルストイの全生涯を濃縮の熱心で傾盡して描く。興味津々として盡きず、而も深き感懐と感銘を興へる大トルストイ傳。

四六判 入装 一・五〇

武者小 路實篤 著 楠木 正成

著者が久振りに創作家の苦しみと喜びを十二分に味へたと云はれる大力作。人間正成の深き苦惱と、愛と涙と信念の中に生き抜く雄姿とを如實に描いた稀有の史外の史傳!!

四六判 入装 一・五〇

武者小 路實篤 著 一休・曾呂利・良寛

三人三様の人生を辿りつゝ、何れも大悟の域に達した偉き心境を如實に描いて現代人に一大示唆を興ふる大傑作!! 見よ! 一讀人生の醍醐味を味ふ此の名篇を!!

四六判 入装 一・五〇

武者小 路實篤 著 大石 良雄

著者の心を注げる近來の大傑作!! 憧れの至妙と懇切深刻なる描寫とは人間大石としての新容面を描いて躍如たらしめ全條讀く讀者の胸底に迫る眞に玲瓏無比の珠玉篇なり。

四六判 入装 一・五〇

武者小 路實篤 著 二宮 尊徳

人道主義の文豪たる著者が、翁の生活を極めて率直に描く。傳説とされつゝありし翁は今や赤煉瓦なる人間として蘇り吾等の進むべき道を教へてくれる。全國民必讀の大偉人傳。

四六判 入装 一・三〇

武者小 路實篤 著 釋迦

偉大なるその誕生から輝かしき晩年に至る迄短ら生ける人間釋迦に接するが如く如實に描かれし而も興味深く、一體何人もその大人格に觸れ、その教を容易に知ることが出来る。

四六判 入装 一・五〇

山中 著 九條武子夫人

天成の明眸と豊かな詞藻と日本婦人の典型たる夫人の全生涯を描く。背の君と哀別離苦、華仕の生活、愛と感懐と信仰に充ちた夫人の姿彷彿として眼前に接するの思ひあらしむ

四六判 入装 一・五〇

永井 柳太郎 著 大隈 重信

國家の非常時に遭遇し、小大隈の名ある永井先生が、維新の大英雄大隈重信侯を慕ふの情禁する能はず、熱心熱涙を絞つて執筆せる大雄辯、見よ!! 全國民必讀の大偉人傳!!

菊甲 洋 四六判 入装 一・五〇

婦見 著 チスレリ

ユダヤ人の子に生れ、操一貫、病弱、無學のチスレリが凡ゆる難關を突破して、遂に英國の大宰相になる迄の波瀾風雲の生涯! 感懐と光明と希望とを齎らす不朽の名傳記。

四六判 入装 一・五〇

婦見 著 バイロン

全英國の婦人が悉く彼を愛したとまで言はれるその美貌その詩才、而も性質は飽く迄も不羈奔放、遂にギリシヤ革命軍中に殉死する薄命儂か三十六年の世界的詩聖の面目躍如

四六判 入装 一・三〇

婦見 著 ビスマーク

大獨逸帝國建設の英雄兒の風采如として全卷に溢る。破瀾萬丈八十有餘年に亘る剛毅、果斷、智謀、熱血の大生涯に讀者は悉く感嘆激賞、眞に近代偉人傳記の白眉篇。

四六判 入装 一・五〇

婦見 著 ナポレオン

日本では容易に求め得ざる材料に基いて、一流の筆筆を揮ひ人間ナポレオンの機みと喜びと憤りと悲しみとを描いて大英雄の風采に接せしめる。未だ嘗て見ざる新史傳。

四六判 入装 一・四〇

譯田 著 エチソン傳

奇蹟的發明王として、二十世紀文明の父と呼ばる、エチソンの一代記、嘗つて低能兒と侮辱され、退校を餘儀なくされた彼の興味盡きせぬ奮闘生涯物語がこれである。

四六判 入装 一・五〇

譯田 著 ヒットラー傳

貧乏官吏の家に生れて孤兒となり、ドン底生活を體驗し、歐洲大戦には志願兵として轉戦、戦後直ちに祖國を救はんと凡ゆる迫害と闘ひ遂に獨逸總統となつた大奇蹟傳。

四六判 入装 一・五〇

譯田 著 ムツソリニ傳

見よ! 熱田宰相の眞面目。一小村の鍛冶屋の子と生れた彼が祖國の爲にフランスを率ゐ、一舉にしてローマに進軍、伊國の運命を双肩に擔ふに至る熱血熱涙の苦闘物語。

四六判 入装 一・五〇

大江 著 ルーズベルト

北海大封鎖を敢行して世界大戦の終熄を早め、政界に入つては特種階級の保守的共和政治を嫌忌し共存共榮の大旗をかざして邁進する。今や其の動向は全世界注目の的。

四六判 入装 一・三〇

